

第11章 実施計画

1. 基本的な考え方

「第6章 保存管理」、「第7章 活用」、「第8章 防災」、「第9章 整備」、「第10章 運営体制」の各章で定めた方向性、方法を踏まえ、本章では、実施すべき施策を短期計画、中期計画、長期計画の3段階で整理する。

短期計画は本計画策定後から令和8年（2026）までの4年間、中期計画は令和9年（2027）から令和14年（2032）までの6年間、長期計画は令和15年（2033）から令和19年（2037）までの5年を想定し、事業の進捗に応じて、適宜見直しを行うものとする。

通常の維持管理である保存管理や継続的な調査、情報発信などについては、短期計画から長期計画にわたり実施する。

全体の工程計画を表11-1に示す。

2. 実施すべき施策

(1) 短期計画

短期計画は本計画策定後、速やかに取り組むべき施策及び段階的な活用を考慮し、建物内の本格的な活用に先立って完了すべき施策を位置付ける。

具体的には、主屋を取り巻く主屋・主屋南地区、池周り地区の庭園部分及び主屋の建造物を対象とした施策に取り組む。また、庭園の背後にあって、庭園整備に先立って整備することが望ましい山林地区の倒木撤去、池や水路の水系に関わる整備及び劣化が著しい物置の修理、はらみの著しい石垣の修理、防災・防犯面で早急な対応が必要な整備のほか、完成に長期間を要するものや、優先的に整備すべきものについて、短期計画に位置付ける。

(2) 中期計画

中期計画は、第2の段階として、建物内外の長期活用までに完了すべき施策を位置付ける。

具体的には、管理面で必要な機能を整備する主屋北地区、敷地下段にあって、来訪者動線の入口となる石階段下地区、水路周り地区における施策に取り組む。また、誘導サインや解説板の整備など、指定地全体に関わる整備についても中期計画に位置付ける。

(3) 長期計画

長期計画は、建物内外の長期活用と並行して実施可能である施策や継続的な調査研究及び検討を要する施策、現段階では急を要しないが経過観察の上、対応が必要と考えられる施策を位置付ける。

具体的には、茶室跡の調査及び復元を含む検討を要する茶室跡・主屋西地区及び工事動線を考慮した主屋北地区、指定地外での施策に取り組む。また、防犯面を考慮した石造物のレプリカ制作、眺望を意識した山林地区の樹木剪定や散策路の整備などについても長期計画に位置付ける。

表 11-1 工程計画

地区区分・建物種別		短期	中期	長期
山林	ア 山林地区			
	イ 主屋・主屋南地区			
	ウ 茶室跡・主屋西地区			
庭園	エ 池周り地区			
	オ 水路周り地区			
	カ 石階段下地区			
	キ 主屋北地区			
	主屋			
建物	物置			
	ボイラー室			
	茶室跡・待合跡			
	東屋跡			
	屏中門			
	東門			
指定地外				

第12章 経過観察

1. 方向性

九年庵の本質的な価値を堅実に保存するために、「第6章 保存管理」、「第7章 活用」、「第8章 防災」、「第9章 整備」「第10章 運営体制」の記載事項について、実態を評価し、継続又は改善につなげていく。実態を評価するにあたっては、実施状況を記録するとともに、必要に応じて専門家等の意見を踏まえ、とりまとめる。

評価結果は、各計画の実施方法に反映する。本計画の見直しが必要な場合は、必要に応じて専門家及び文化庁等の助言・指導を踏まえ、変更を行う。

2. 経過観察の方法

(1) 保存管理に係る経過観察

保存管理の経過観察は主に日常の維持管理行為によって、排水施設、危険木や危険枝、枯死木等の把握、石垣・石階段や石造物の劣化状況、池・水路の堆積物、護岸の状況、建造物の保存状況等の各種構成要素の状況確認を行う。

管理者は経過観察、点検により気づいた点を記録し、月報や業務報告に記載して県に報告する。県は報告に応じて、現状を把握し、対応策を協議する。

(2) 活用に係る経過観察

活用に係る経過観察は、来訪者数、各種イベントの開催数、情報発信ツール（web、SNS、パンフレット等）の利用状況を記録し、定量的に把握する。また、必要に応じて利用者へのアンケート調査等の実施を検討する。

各種調査・研究については報告書を蓄積する。

(3) 防災に係る経過観察

防災に係る経過観察として、各種防災、防犯設備は定期的に点検、検査を行い、正しく機能することを確認する。

大雨、強風、地震等が発生した際には各種構成要素に被害や異常がないか点検を行う。管理者が被害や異変に気づいた場合には、速やかに県に報告する。県は報告に応じて、現状を把握し、対応策を協議する。

(4) 整備に係る経過観察

整備に係る経過観察として、本計画に基づく施策の進捗状況を確認する。

各種構成要素の保存整備については、修理報告書として記録し、蓄積する。

進捗状況について、必要に応じて専門家等への意見聴取を行い、意見を踏まえ、その後の施策に反映し、PDCAサイクルが機能するようにする。

(5) 運営体制に係る経過観察

運営体制に係る経過観察として、管理者の勤務状況の把握、運営に関する意見収集を行う。

資料編

資料編

1. 史資料

(1) 図面

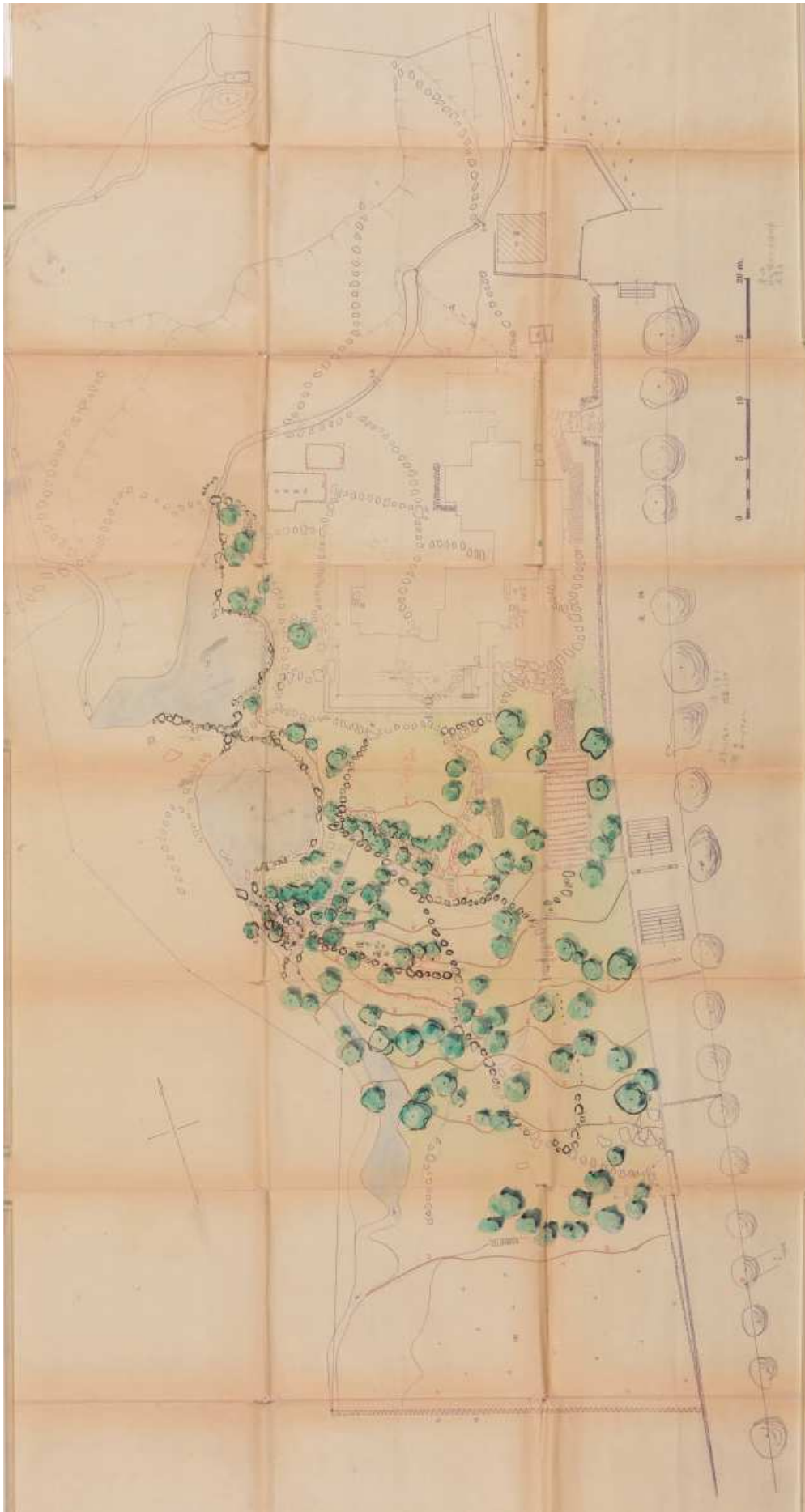
掲載資料一覧

番号	資料名※	作成者・所蔵	年代	資料概要
資料1	(仁比山山荘庭園実測図)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月か	1/200、青焼、80cm×112cm
資料2	仁比山山荘庭園改造計画案	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月か	1/120、青焼に彩色、80cm×112cm×163cm、森蘊直筆
資料3	(仁比山山荘庭園実測図)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月か	1/120、青焼に鉛筆書き、169cm×79cm、敷地図に森蘊の実測結果を追記か
資料4	(仁比山山荘敷地図、地区割図)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)3月25日	1/300、青焼に鉛筆書き、72.5cm×52cm、「野村」印あり
資料5	(仁比山山荘敷地図、追記有り)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)3月25日	1/300、青焼に鉛筆書き、72.5cm×52cm、「野村」印あり
資料6	(仁比山山荘庭園実測図、整備案メモ書き)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月か	1/120、青焼、鉛筆書き、159cm×80cm
資料7	(庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月13日	方眼紙(裏)、30cm×21cm、「白鳥神社」と記載あり
資料8	(庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月14日	方眼紙(裏)、30cm×21cm、「三日目」と記載有り
資料9	(庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月14日	方眼紙(裏)、30cm×21cm、その一
資料10	(庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月14日	方眼紙(裏)、30cm×21cm、その二
資料11	(庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月14日	方眼紙(裏)、30cm×21cm、その三
資料12	(庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)6月14日	方眼紙(裏)、30cm×21cm、その四
資料13	(庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か)	奈良文化財研究所	昭和35年(1970) 6月13～15日のいずれかか	方眼紙(裏)、30cm×21cm
資料14	(庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か)	奈良文化財研究所	昭和35年(1970) 6月13～15日のいずれかか	方眼紙(裏)、30cm×21cm
資料15	(庭園実測図原図、仁比山山荘 建物)	奈良文化財研究所	昭和35年(1970) 6月13～15日のいずれかか	方眼紙、30cm×21cm、建物外形を記載
資料16	仁比山山荘平面図、日華ゴム株式会社(建物図面)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)3月24日	1/100、青焼、73cm×54cm、実測は3月21日
資料17	仁比山山荘平面図、日華ゴム株式会社(建物図面、増築設計図か)	奈良文化財研究所	昭和35年 (1970)3月25日	1/100、青焼、73cm×53cm、実測は3月21日、製図3月24日

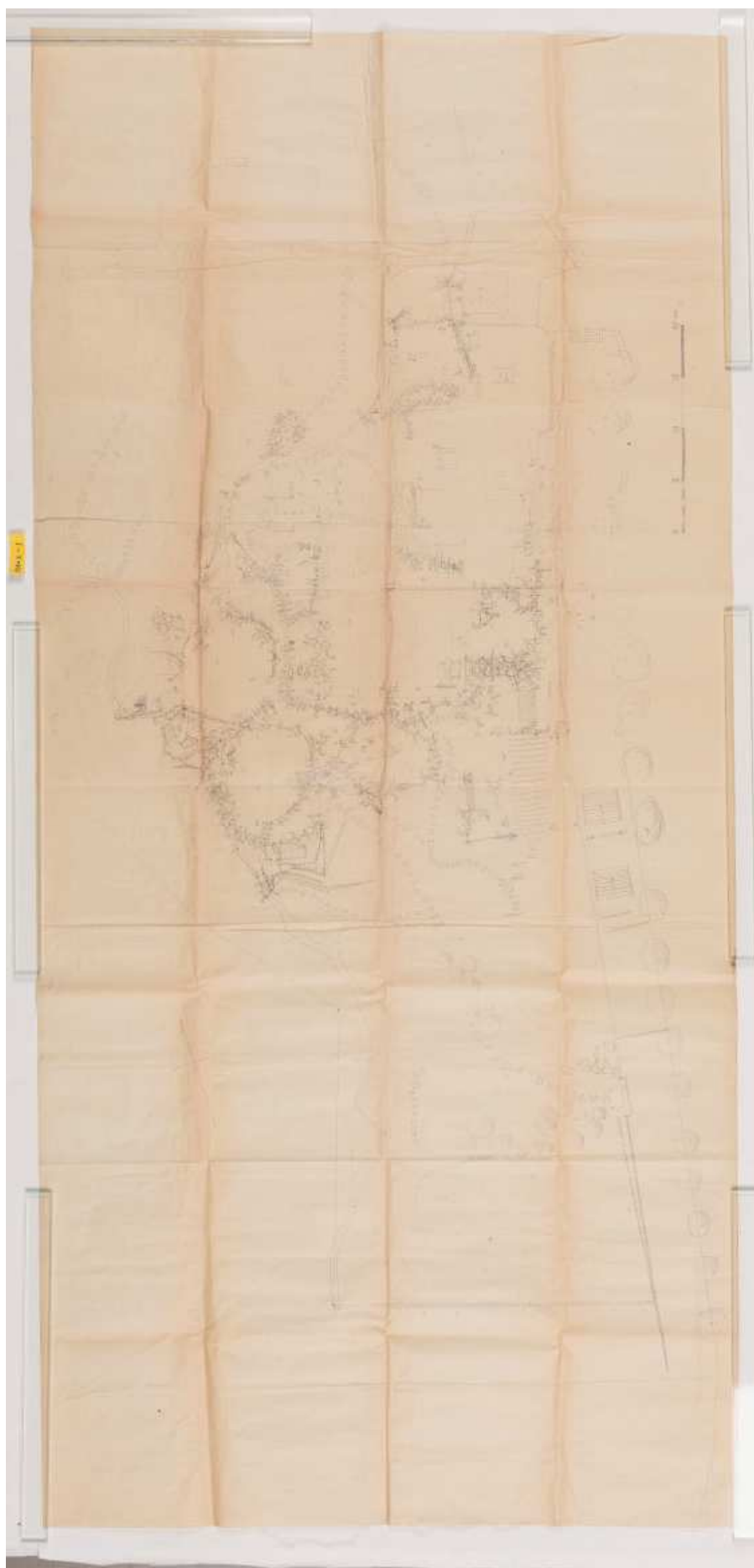
※ ()内は任意名



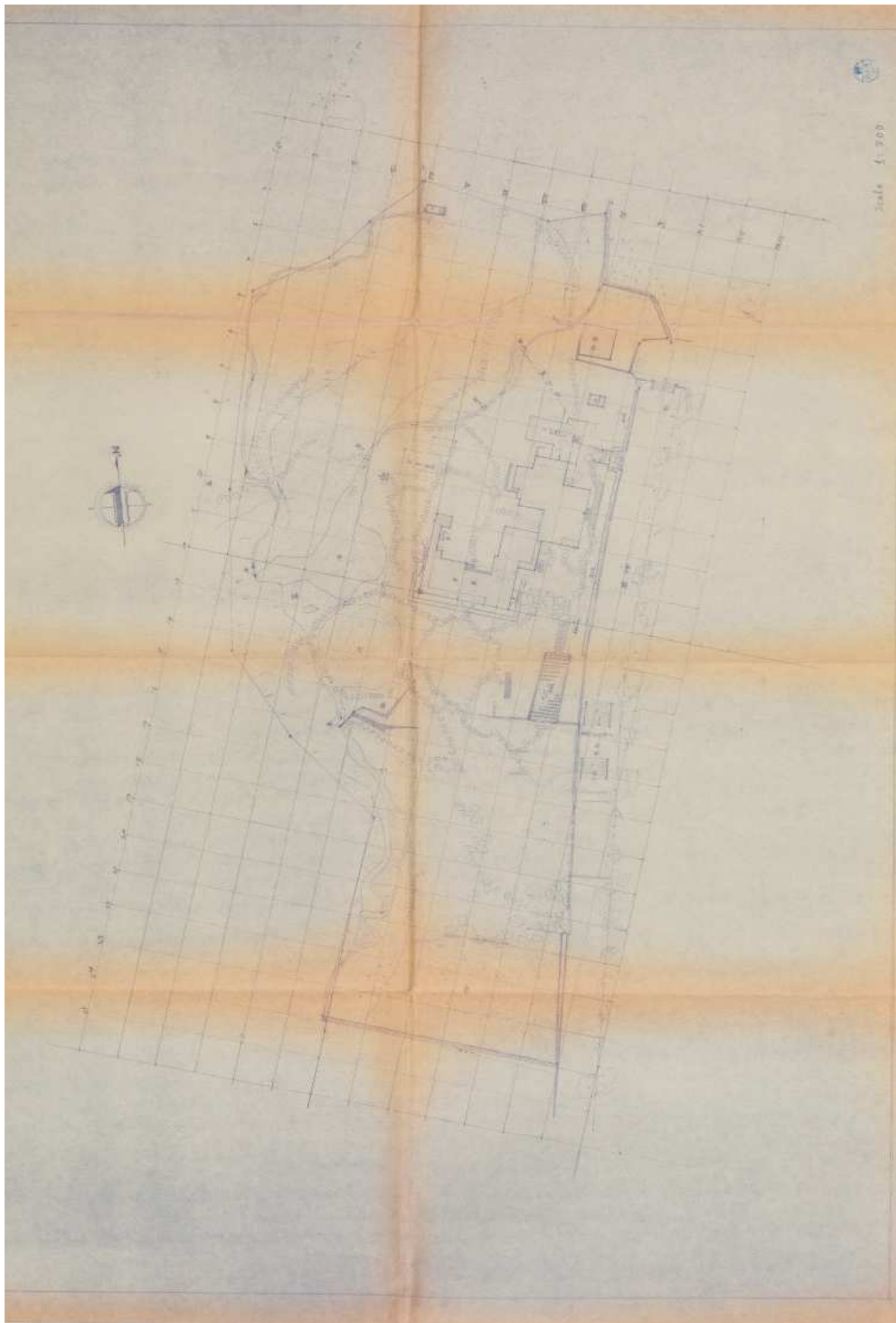
資料1 (仁比山山莊庭園実測図) (昭和35年(1970)6月頃)



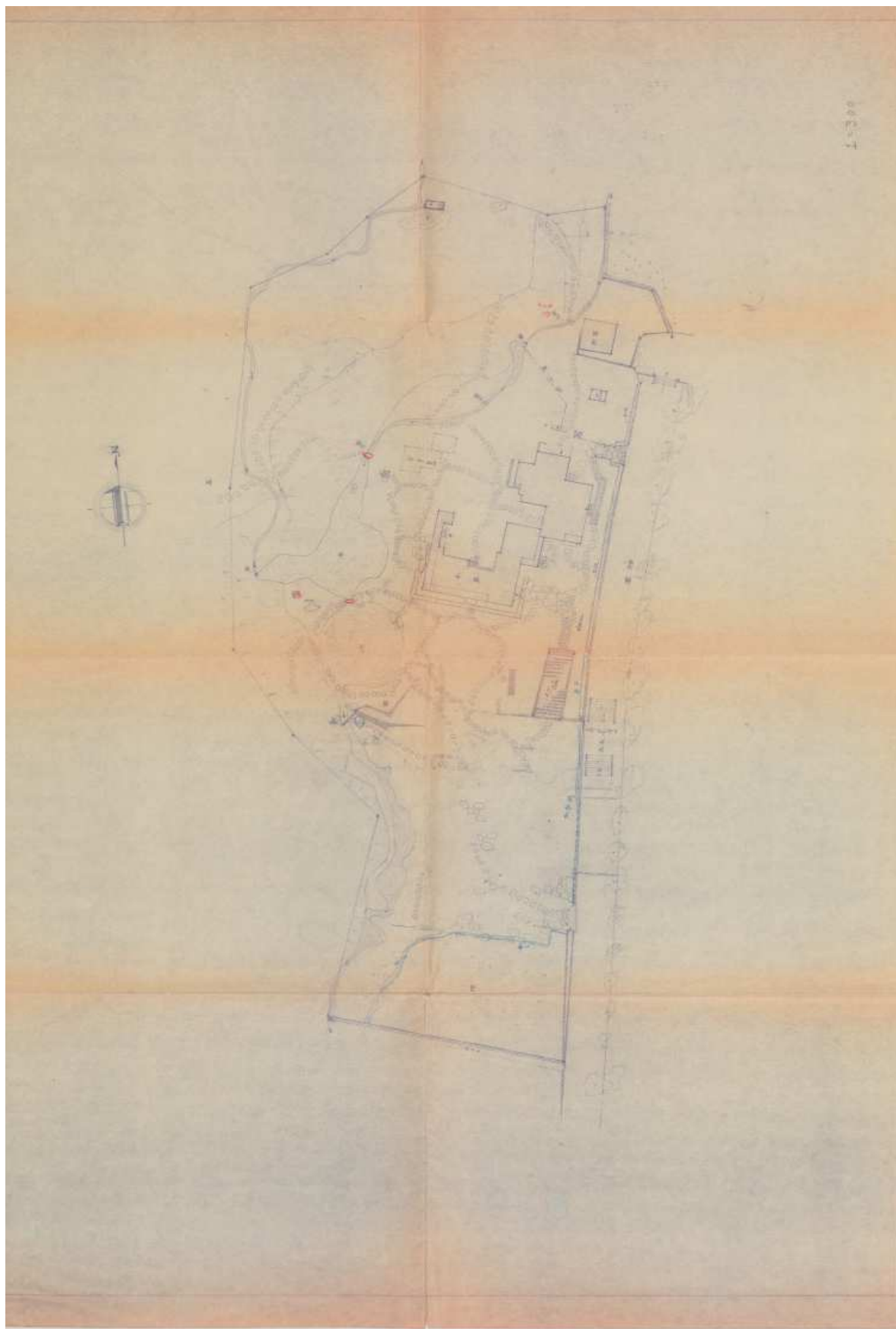
資料2 仁比山山莊庭園改造計畫案（昭和35年（1970）6月頃）



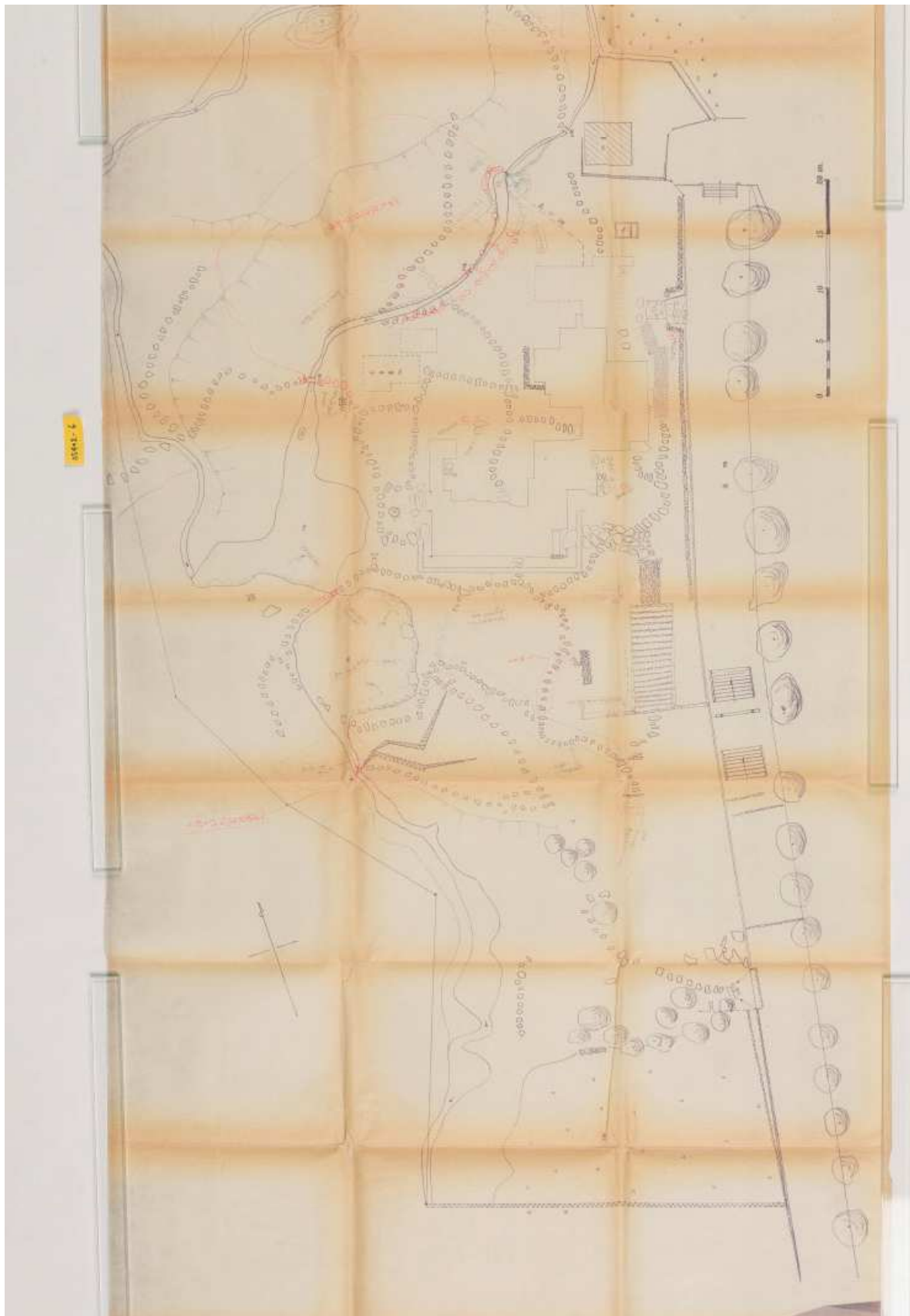
資料3 (仁比山山莊庭園実測図) (昭和35年(1970)6月頃)



資料4 (仁比山山莊敷地図、地区割図)(昭和35年(1970)3月25日)



資料5 (仁比山山荘敷地図、追記有り) (昭和35年(1970)3月25日)



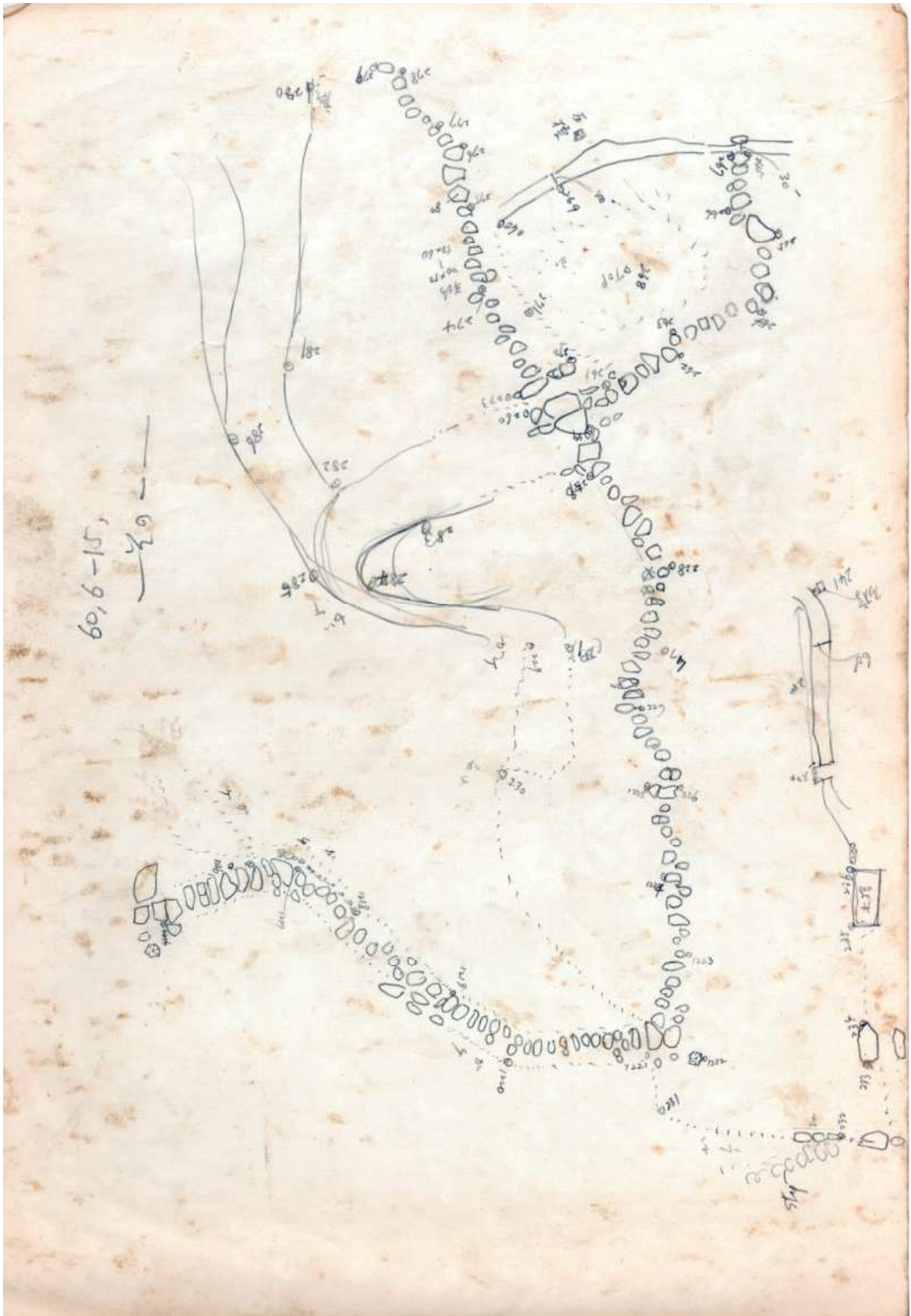
資料6 (仁比山山荘庭園実測図、整備案メモ書き) (昭和35年(1970)6月頃)



資料7 (庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か) (昭和35年(1970)6月13日)



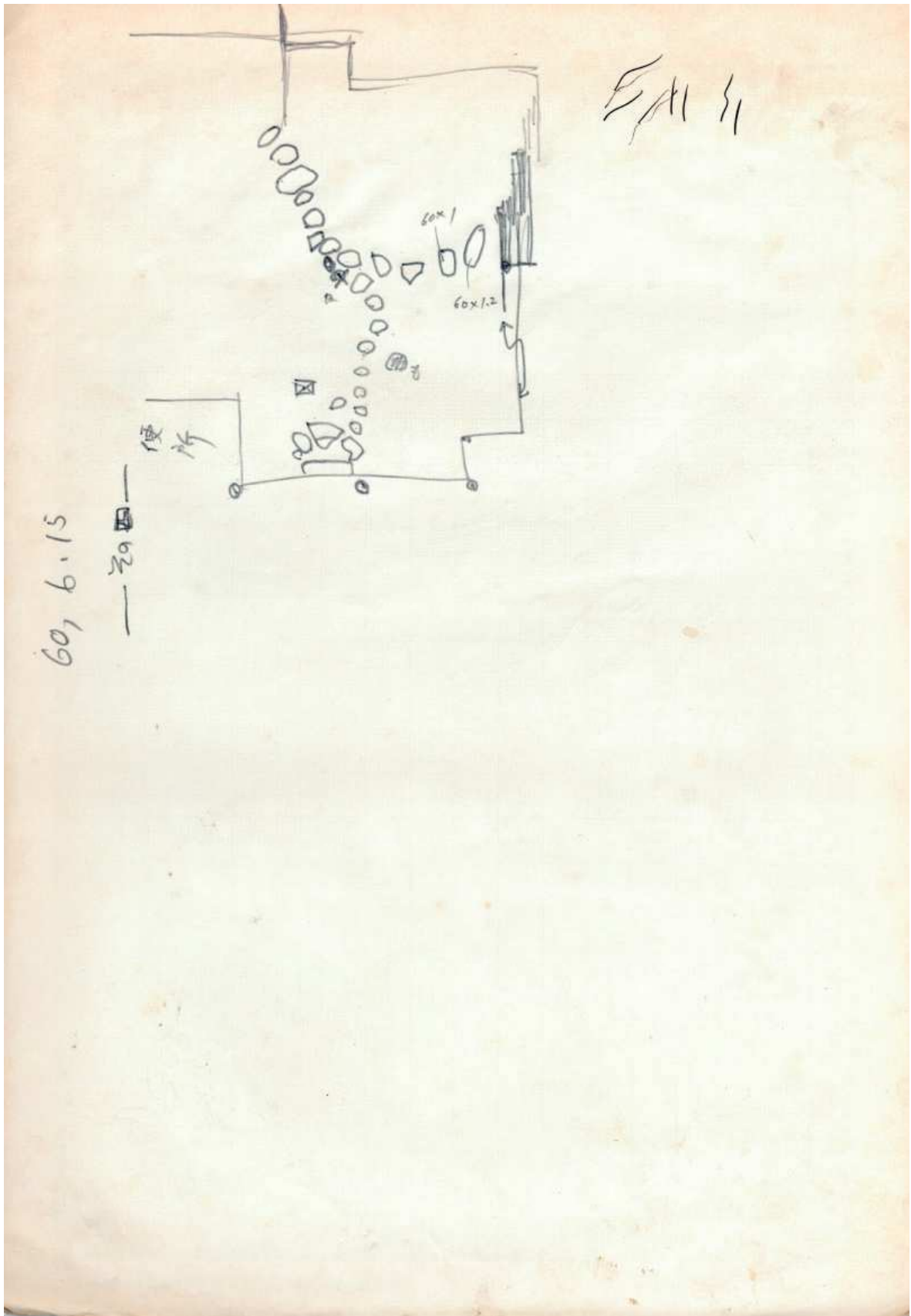
資料8 (庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か) (昭和35年(1970)6月14日)



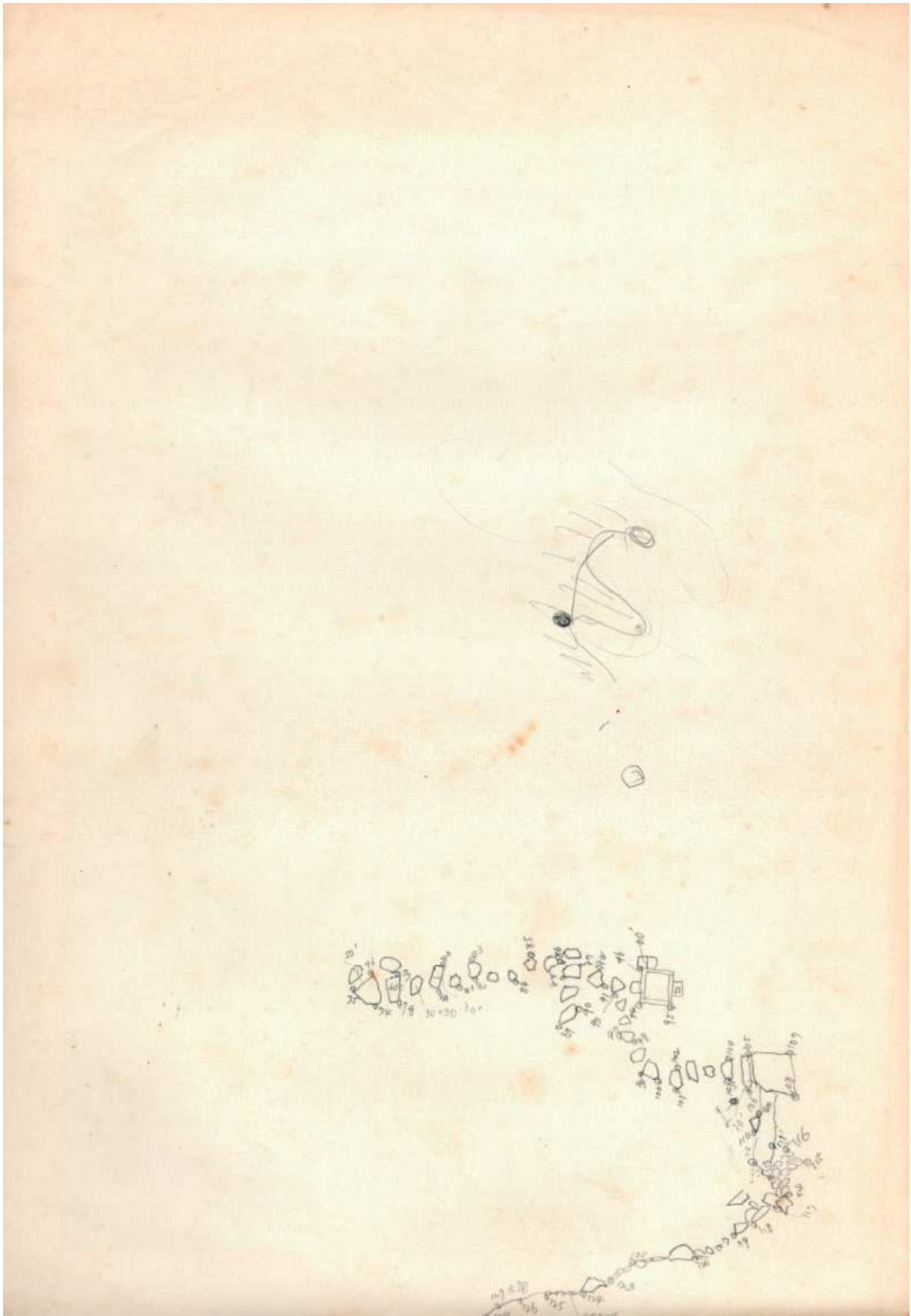
資料9 (庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か) (昭和 35 年 (1970) 6 月 14 日)



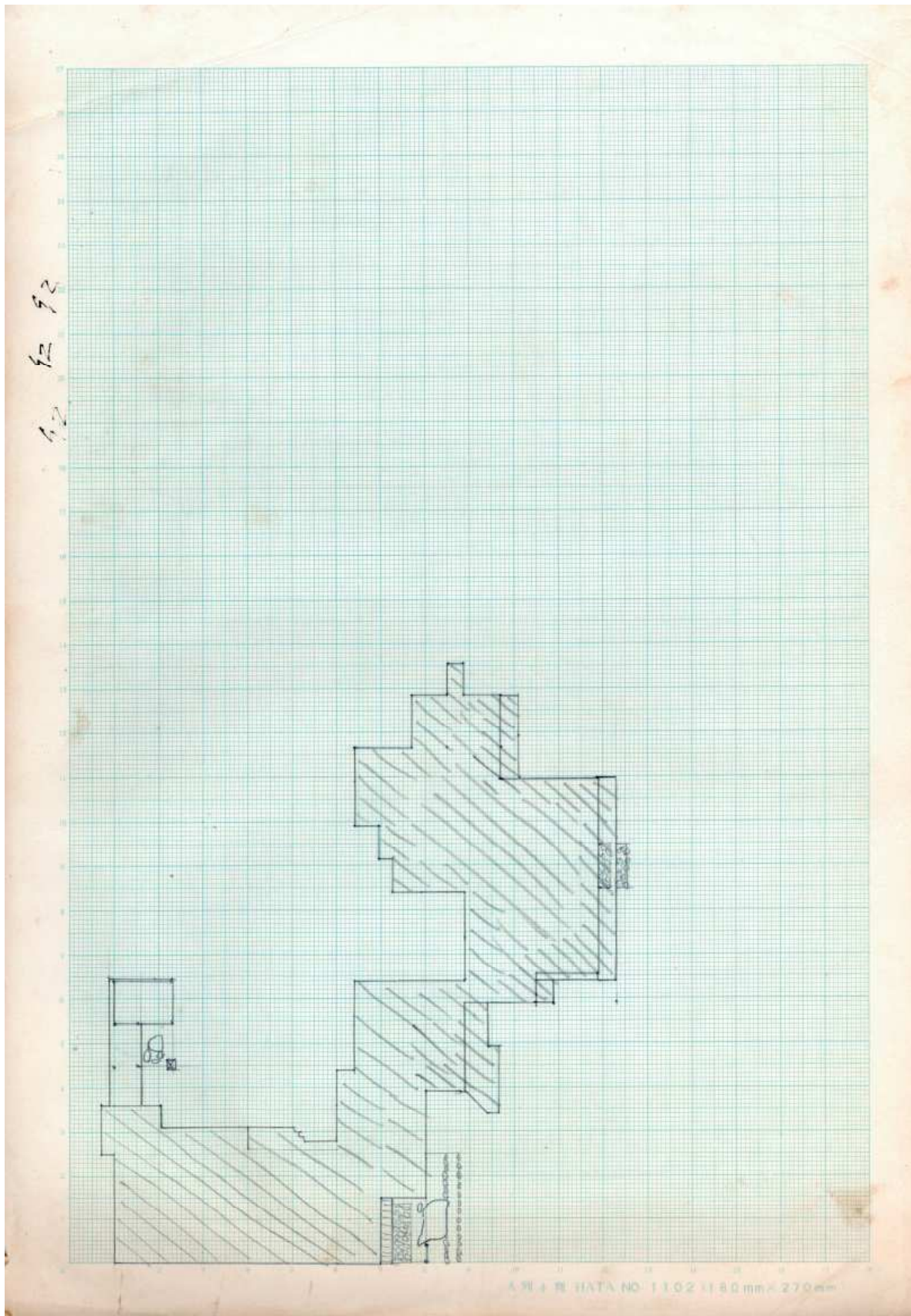
資料 11 (庭園実測図原図、仁比山山莊庭園か) (昭和 35 年 (1970) 6 月 14 日)



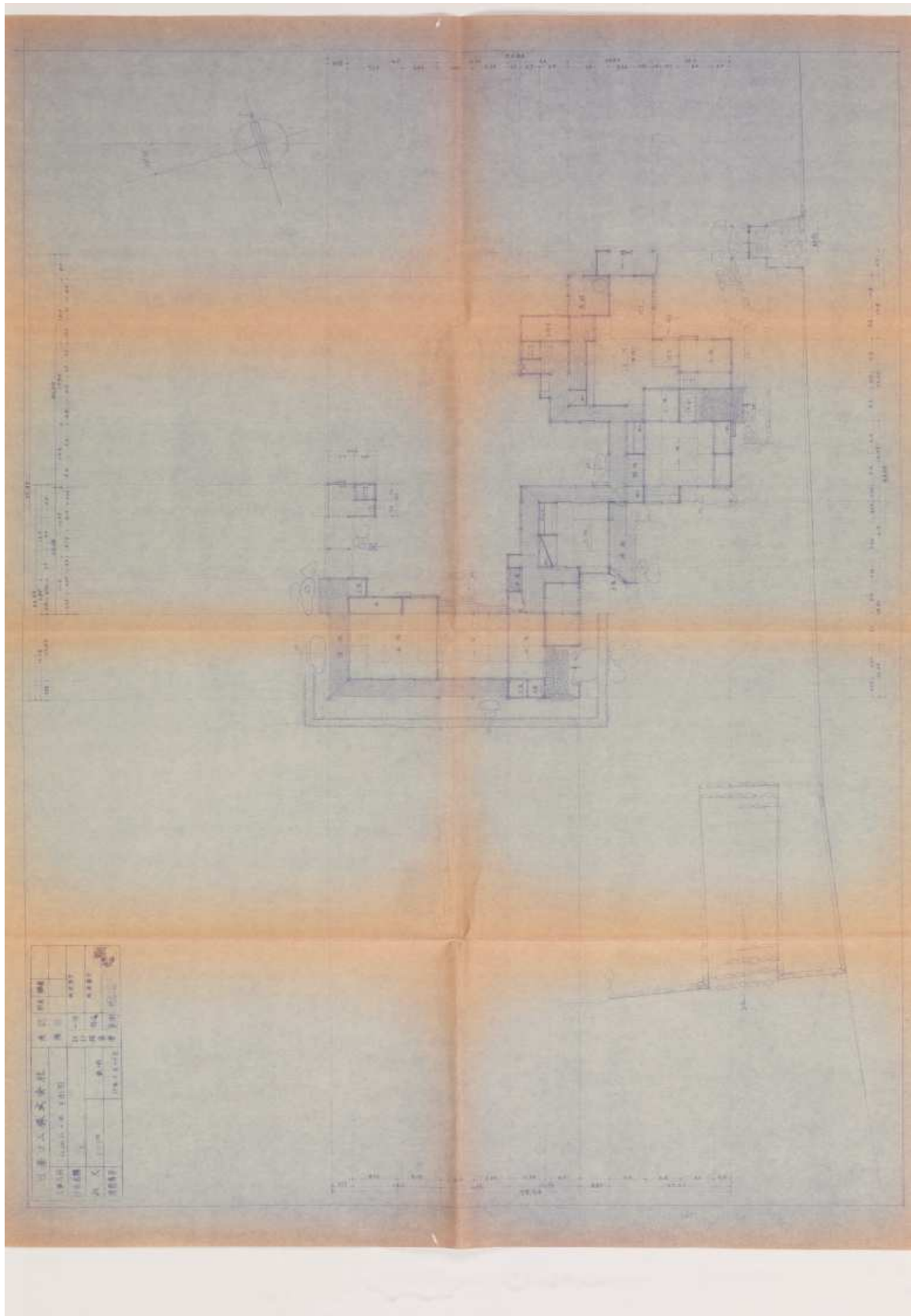
資料 12 (庭園実測図原図、仁比山山荘庭園か) (昭和 35 年 (1970) 6 月 14 日)



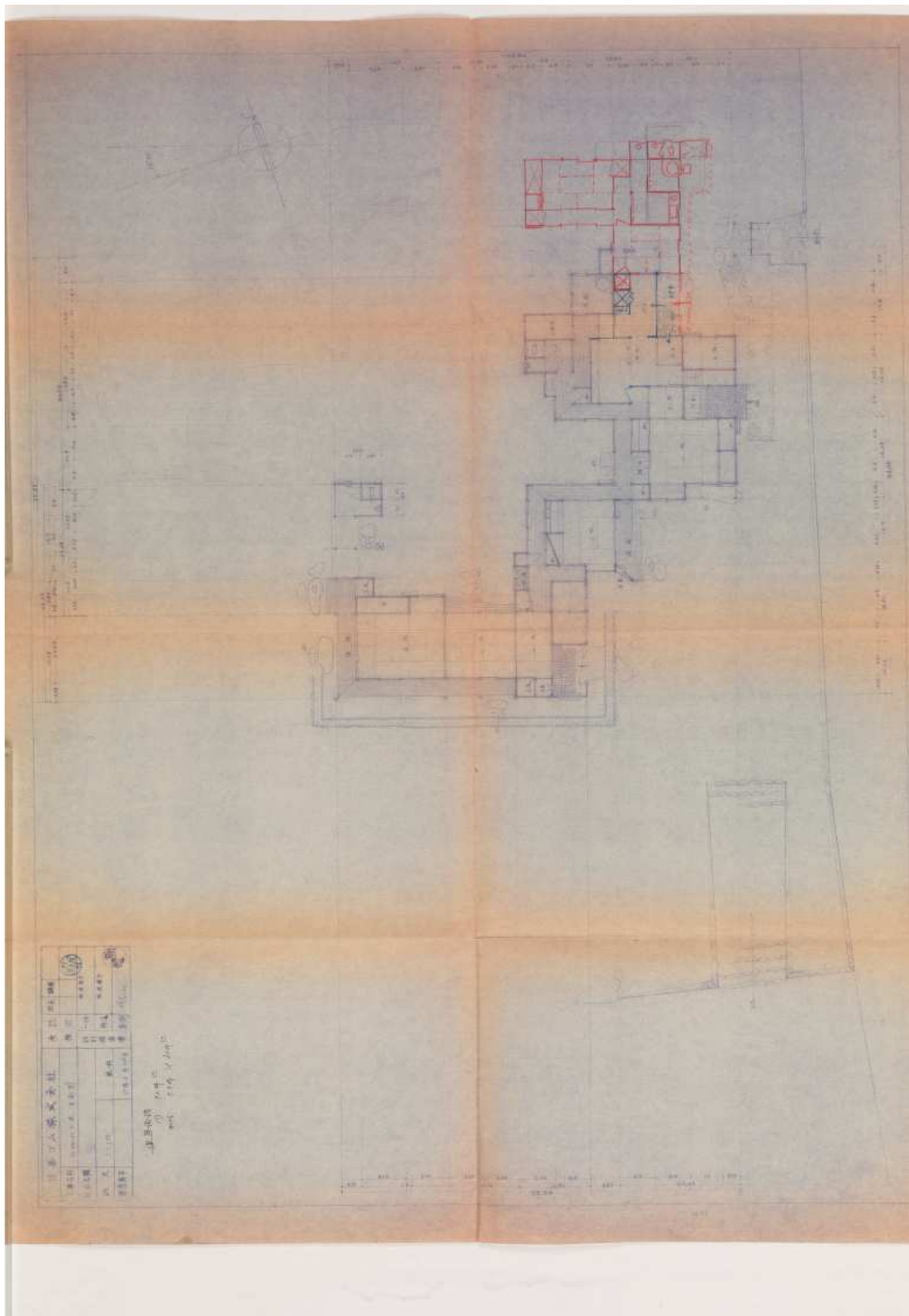
資料 14 (庭園実測図原図、仁比山山莊庭園か) (昭和 35 年 (1970) 6 月 13 ~ 15 日のいずれか)



資料 15 (庭園実測図原図、仁比山山荘 建物) (昭和 35 年 (1970) 6 月 13 ~ 15 日のいずれか)



資料 16 仁比山山荘平面図、日華ゴム株式会社（建物図面）（昭和 35 年（1970）3 月 24 日）



資料 17 仁比山山荘平面図、日華ゴム株式会社（建物図面、増築計画案か）
（昭和 35 年（1970）3 月 25 日）

(2) 写真

掲載資料一覧

番号	資料名※	所蔵・出典	年代	番号	資料名※	所蔵・出典	年代
資料 1	大隈重信歓迎会	大隈侯爵講演集： 帰郷記念	大正 6	資料 17	客間前の下池	奈良文化財研究所	年代不詳
資料 2	山林部分	奈良文化財研究所	昭和 35 頃	資料 18	客間前の下池 2	奈良文化財研究所	年代不詳
資料 3	山林部分 2	奈良文化財研究所	昭和 35 頃	資料 19	客間縁から見た 池周り	奈良文化財研究所	年代不詳
資料 4	主屋西側遠景	奈良文化財研究所	昭和 35 頃	資料 20	客間縁から見た 池周り 2	奈良文化財研究所	年代不詳
資料 5	主屋西側	奈良文化財研究所	昭和 35 頃	資料 21	客間縁から見た 池周り (カラー)	奈良文化財研究所	年代不詳
資料 6	主屋南側遠景	奈良文化財研究所	昭和 35 頃	資料 22	池周り	奈良文化財研究所	年代不詳
資料 7	主屋南側	奈良文化財研究所	昭和 35 頃	資料 23	池周り (カラー)	奈良文化財研究所	年代不詳
資料 8	主屋南東側	奈良文化財研究所	昭和 35 頃	資料 24	平庭 (カラー)	奈良文化財研究所	年代不詳
資料 9	佛間前 (伐採前)	奈良文化財研究所	昭和 35 前か	資料 25	遠景	『九年庵 (仁比山 生活環境保全林) の調査報告書』	平成 2 頃
資料 10	佛間前 (伐採後)	奈良文化財研究所	昭和 35 頃	資料 26	表玄関東面	『九年庵 (仁比山 生活環境保全林) の調査報告書』	平成 2 頃
資料 11	石階段下	奈良文化財研究所	昭和 35 頃	資料 27	主屋西側	『九年庵 (仁比山 生活環境保全林) の調査報告書』	平成 2 頃
資料 12	客間から見た平 庭	奈良文化財研究所	昭和 35 頃				
資料 13	客間床の間	奈良文化財研究所	昭和 35 頃				
資料 14	客間から見た平 庭	奈良文化財研究所	年代不詳				
資料 15	平庭	奈良文化財研究所	年代不詳				
資料 16	平庭 2	奈良文化財研究所	年代不詳				

※名称は任意



資料 1 大隈重信歓迎会 (大正 6 年 (1917)、出典『大隈侯爵講演集：帰郷記念』)



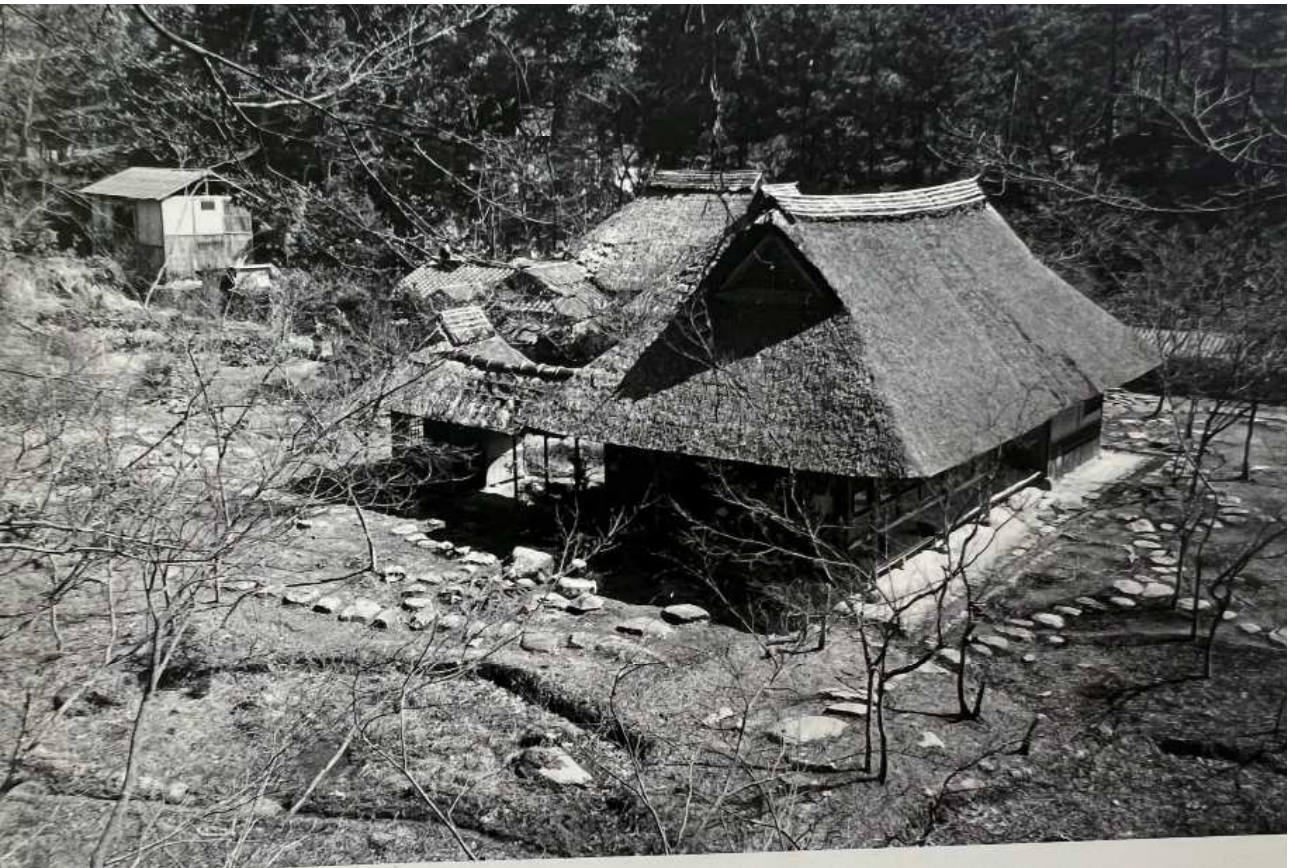
資料2 山林部分（昭和35年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



資料3 山林部分2（昭和35年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



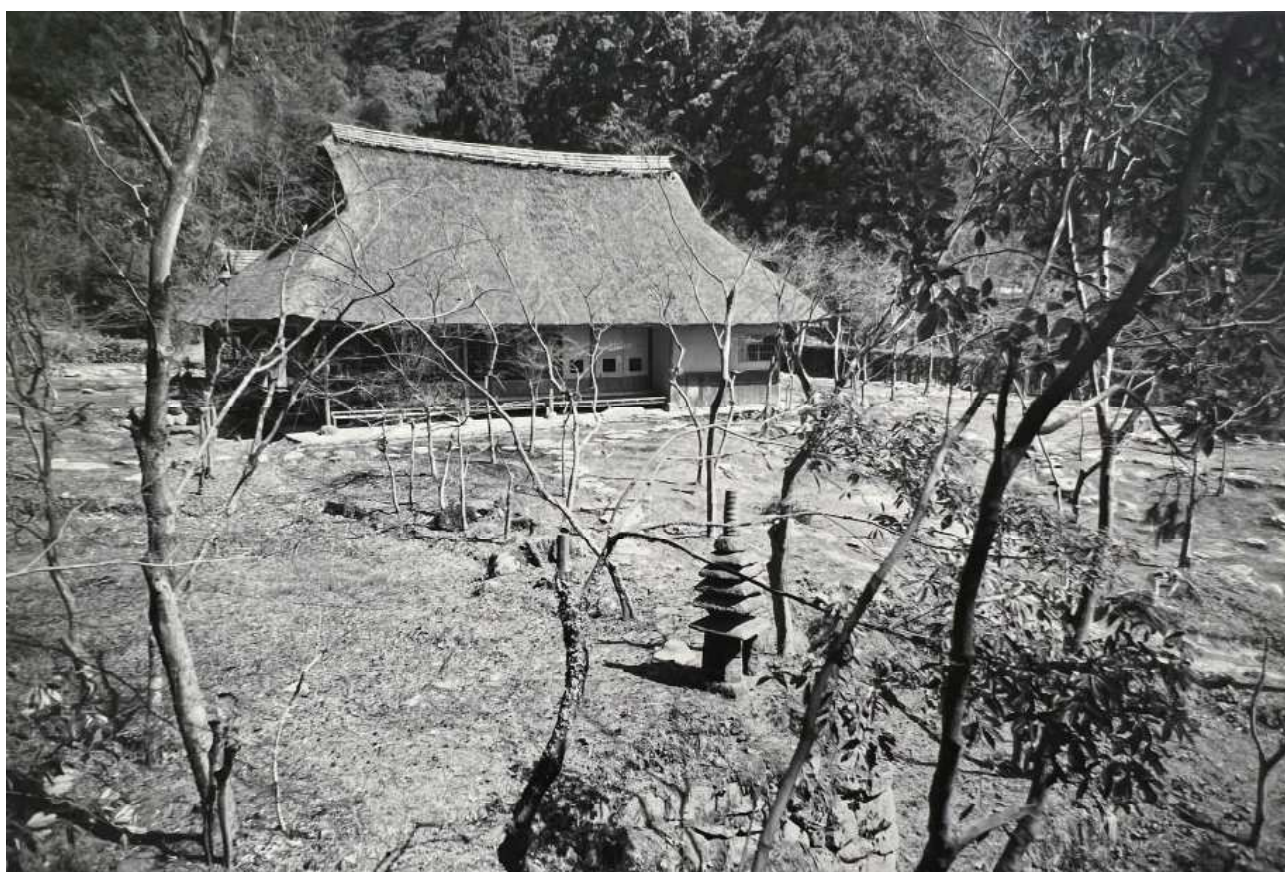
資料4 主屋西側遠景（昭和35年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



資料5 主屋西側（昭和35年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



資料6 主屋南側遠景（昭和35年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



資料7 主屋南側（昭和35年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



資料8 主屋南東側（昭和35年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



資料9 佛間前（マツ伐採前）（昭和35年（1960）前か、奈良文化財研究所蔵）



資料 10 佛間前（伐採後）（昭和 35 年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



資料 11 石階段下（昭和 35 年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



資料 12 客間から見た平庭（昭和 35 年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



資料 13 客間床の間（昭和 35 年（1960）頃、奈良文化財研究所蔵）



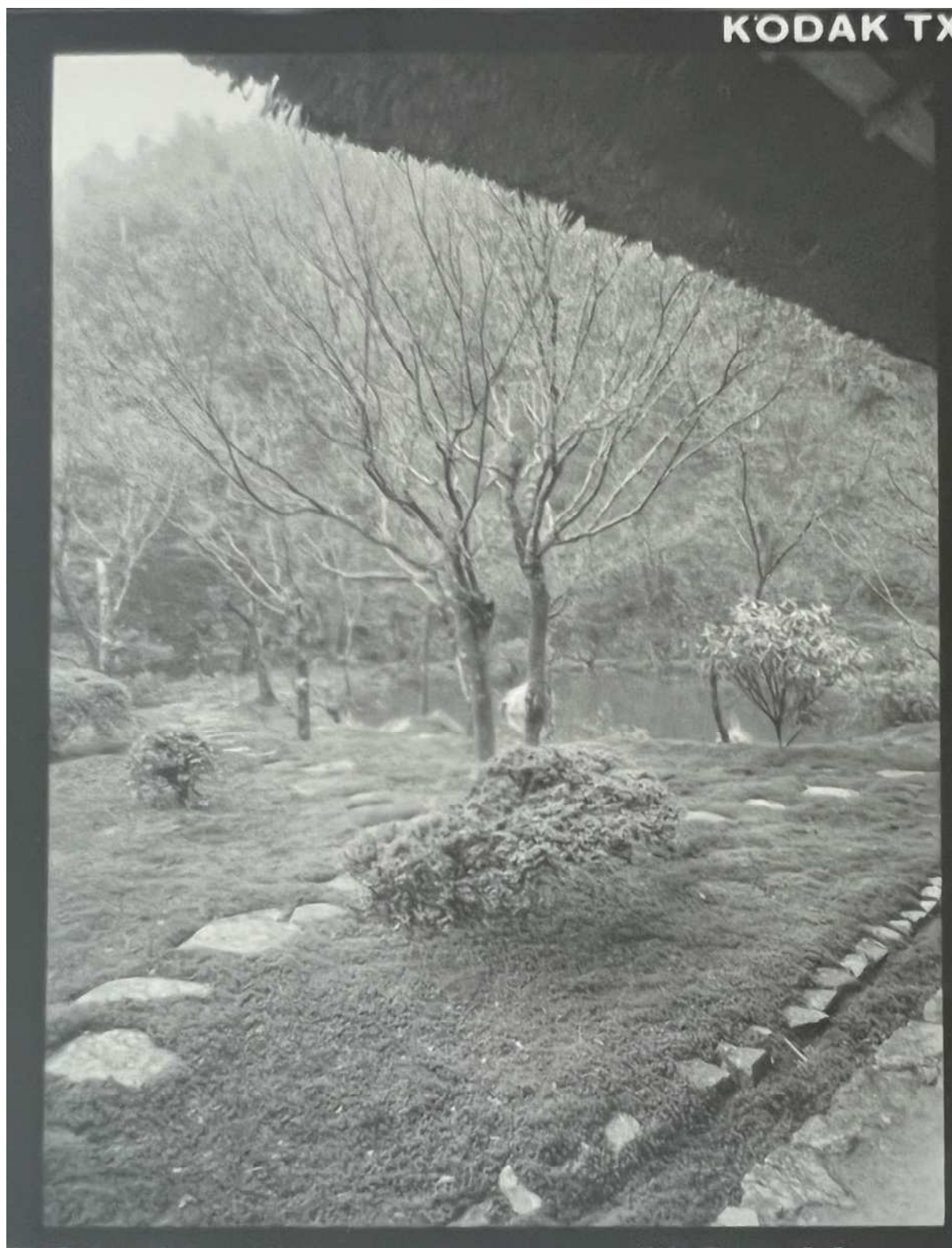
資料 14 客間から見た平庭（年代不詳、奈良文化財研究所蔵）



資料 15 平庭（年代不詳、奈良文化財研究所蔵）



資料 16 平庭 2 (年代不詳、奈良文化財研究所蔵)



資料 17 客間前の下池（年代不詳、奈良文化財研究所蔵）



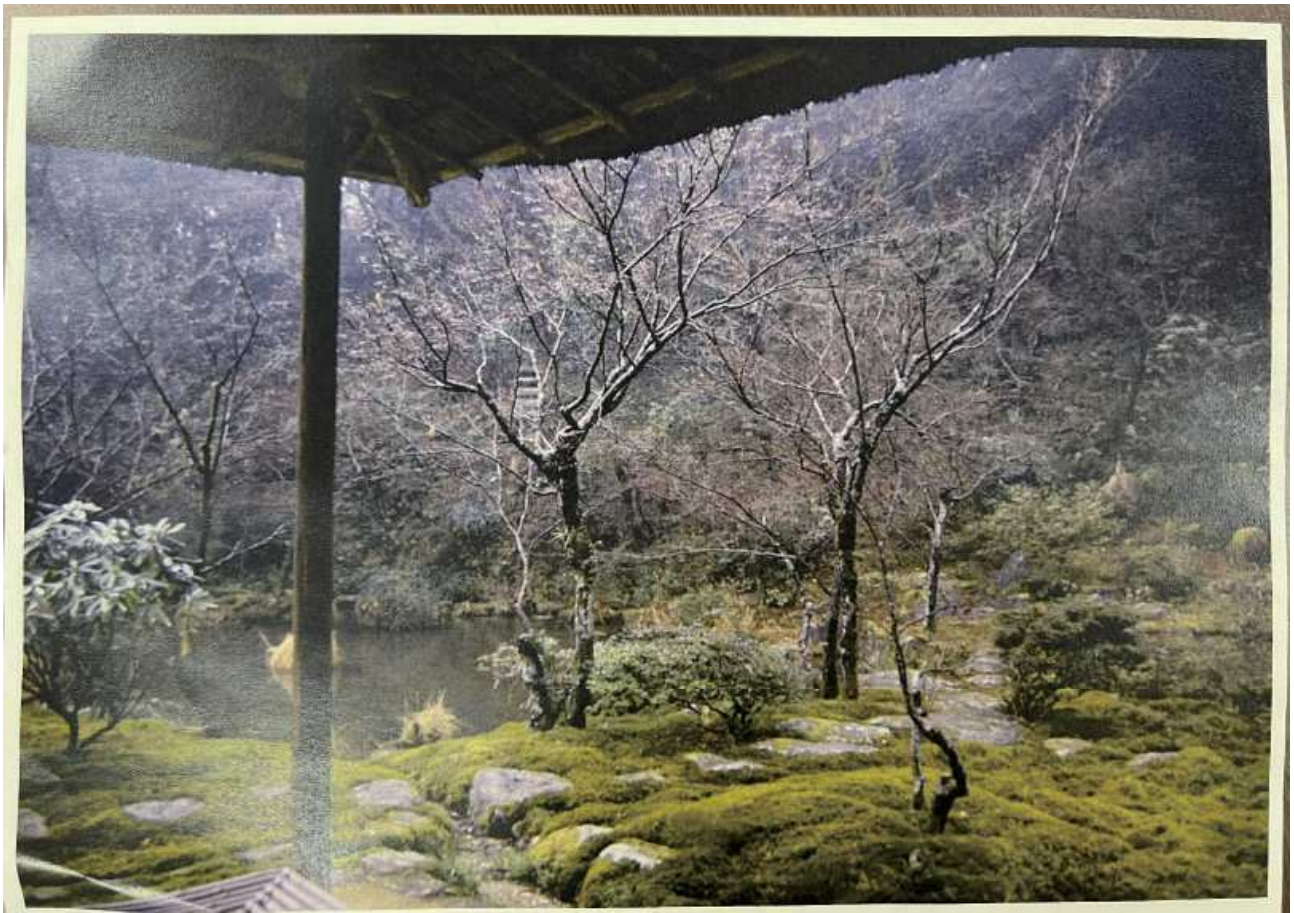
資料 18 客間前の下池 2 (年代不詳、奈良文化財研究所蔵)



資料 19 客間縁から見た池周り (年代不詳、奈良文化財研究所蔵)



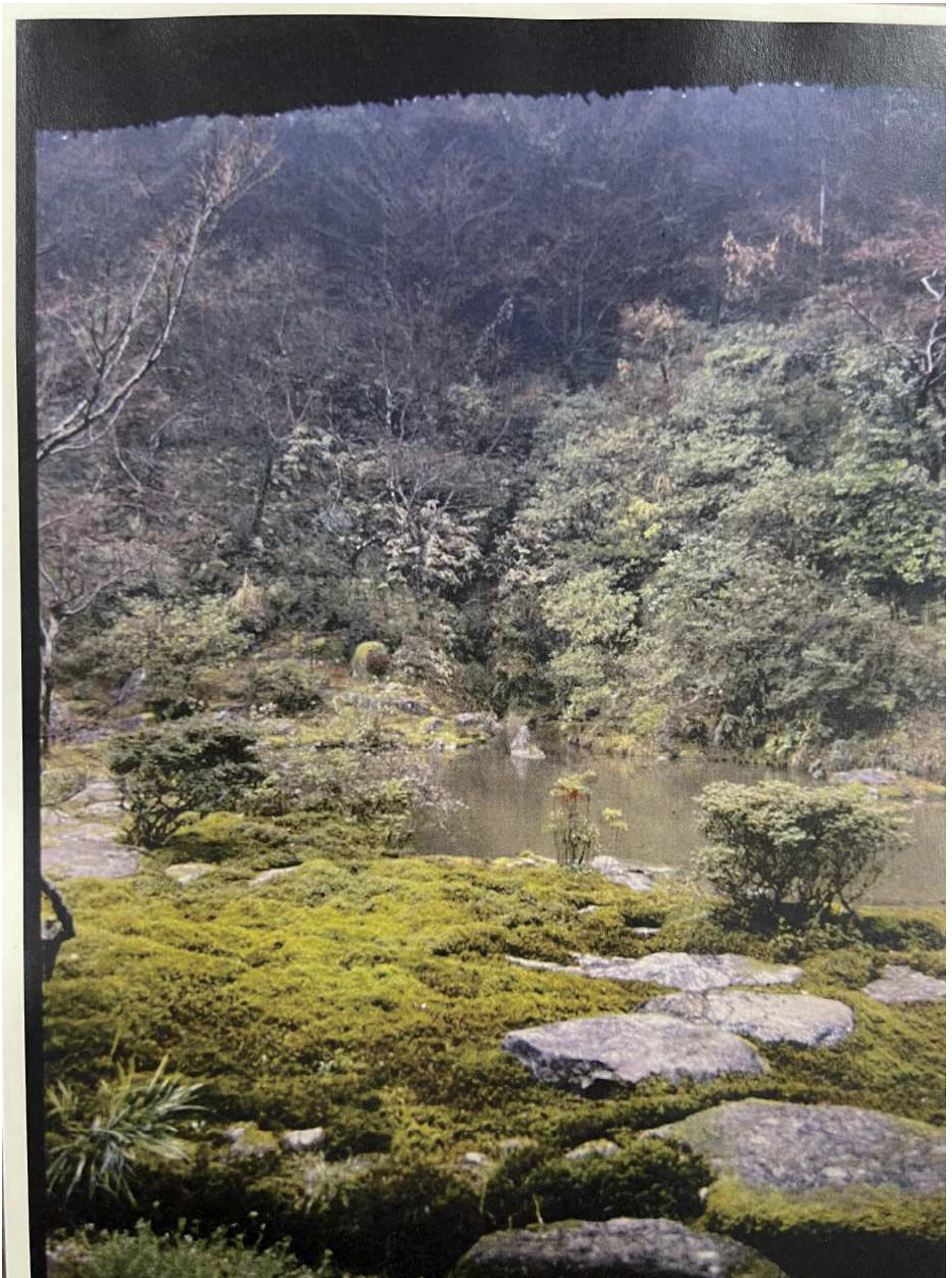
資料 20 客間縁から見た池周り 2 (年代不詳、奈良文化財研究所蔵)



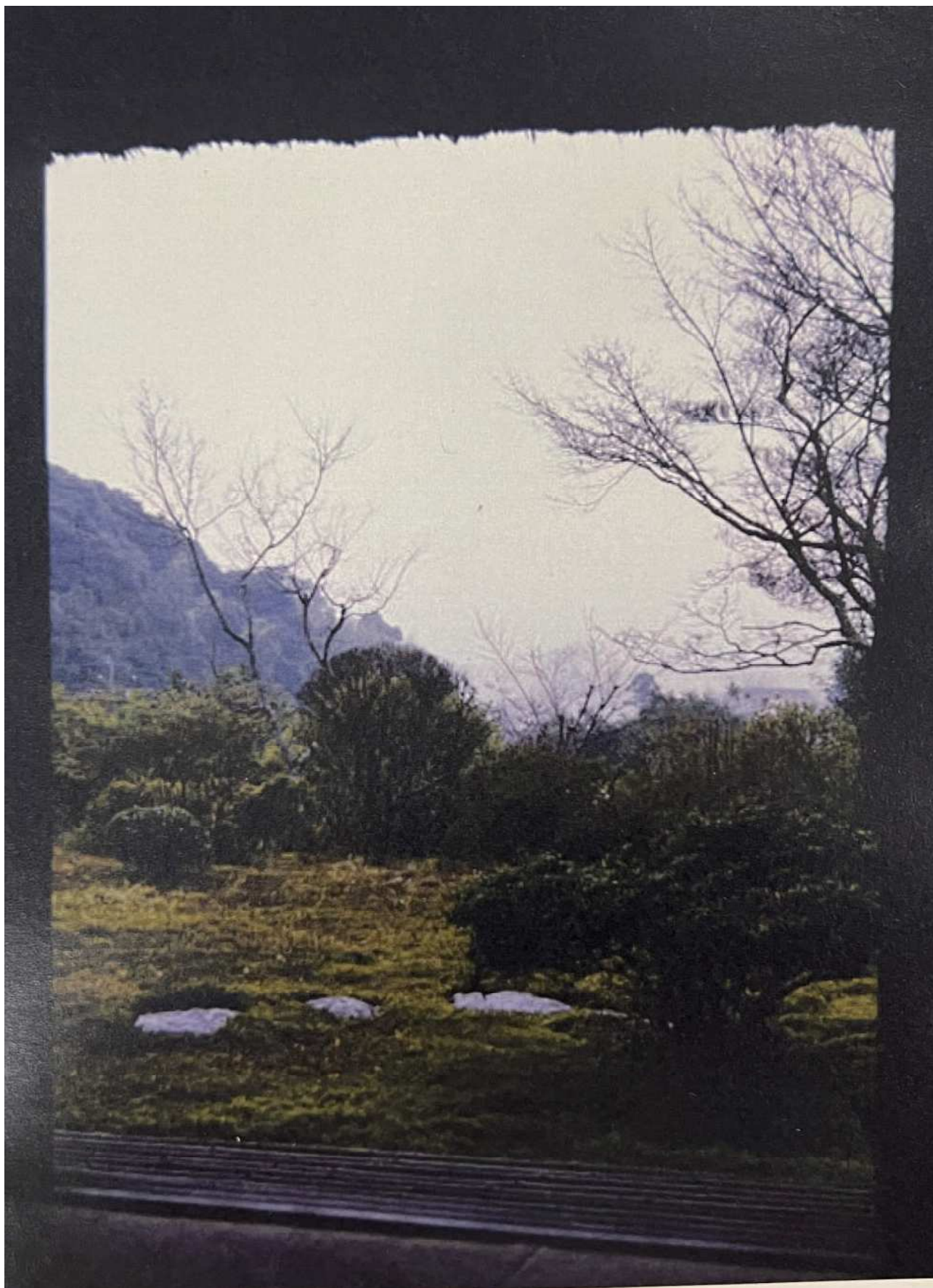
資料 21 客間縁から見た池周り（カラー）（年代不詳、奈良文化財研究所蔵）



資料 22 池周り（年代不詳、奈良文化財研究所蔵）



資料 23 池周り（カラー）（年代不詳、奈良文化財研究所蔵）



資料 24 平庭（カラー）（年代不詳、奈良文化財研究所蔵）



資料 25 遠景（平成 2 年（1990）頃、『九年庵（仁比山生活環境保全林）の調査報告書』より転載）



資料 26 表玄関東面（平成 2 年（1990）頃、『九年庵（仁比山生活環境保全林）の調査報告書』より転載）



資料 27 主屋西側（平成 2 年（1990）頃、『九年庵（仁比山生活環境保全林）の調査報告書』より転載）

2. 調査結果

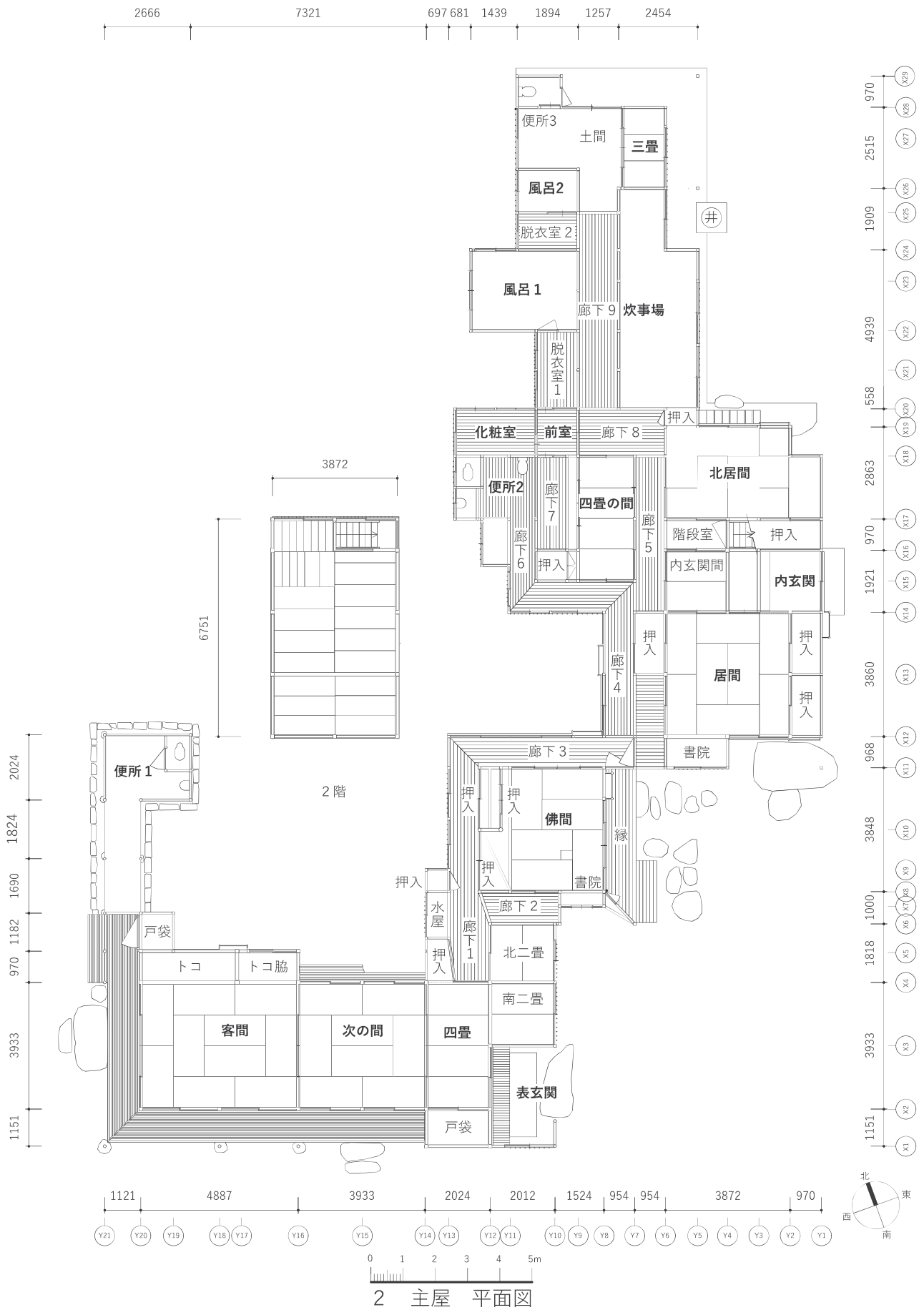
(1) 建物調査

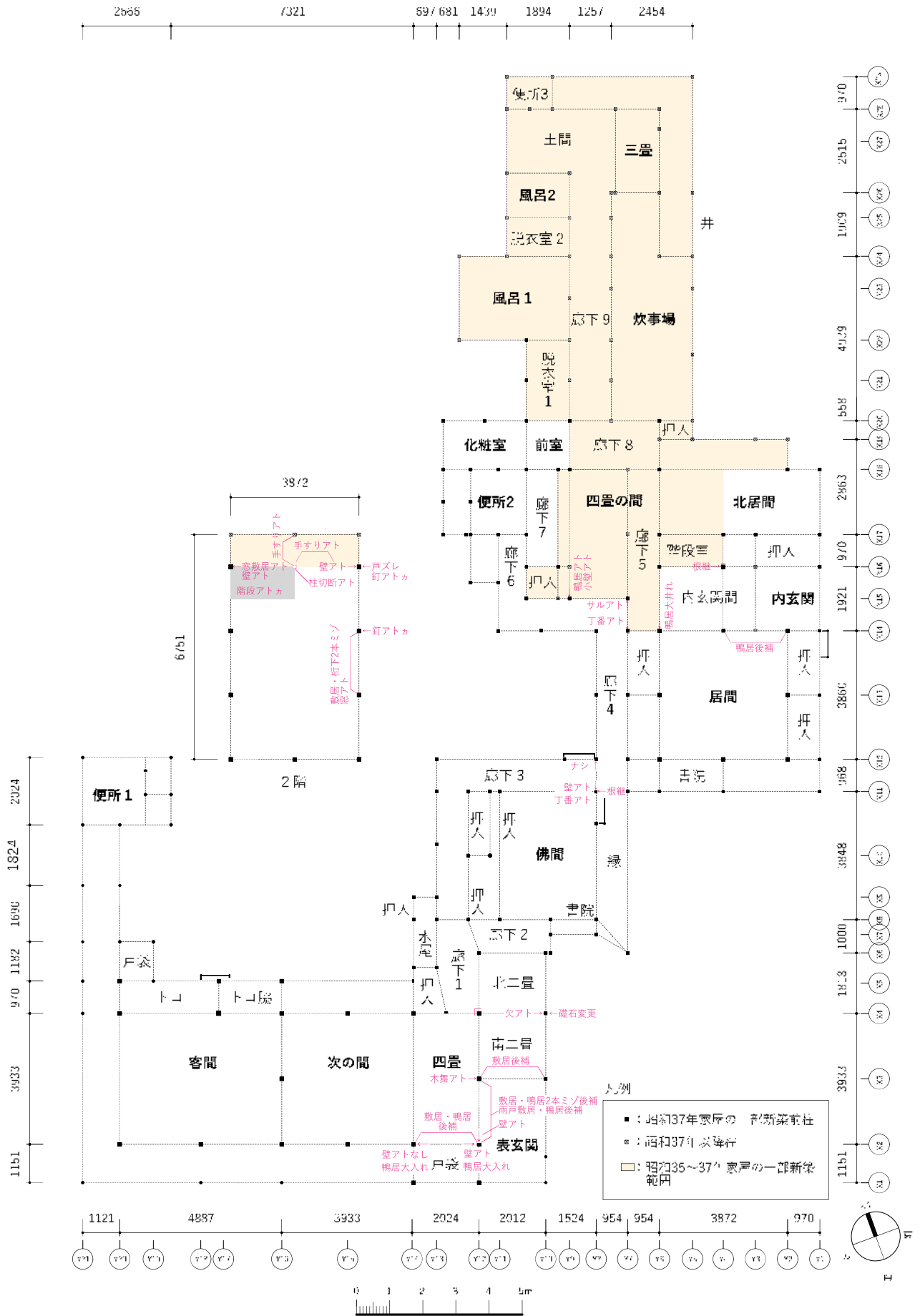
図面表

図面番号	図面名
1	配置図
2	主屋 平面図
3	主屋 痕跡図 (内法下)
4	主屋 痕跡図 (内法)
5	主屋 痕跡図 (内法上)
6	主屋 屋根伏図
7	主屋 立面図
8	主屋 佛間棟 断面図
9	主屋 客間棟 断面図
10	主屋 居間棟 断面図
11	主屋 炊事場棟・便所棟 断面図
12	主屋 基礎伏図
13	主屋 床伏図
14	主屋 桁梁伏図
15	主屋 小屋伏図
16	茶室跡・待合跡 平面図
17	物置・ボイラー室 平面図
18	宝珠露盤
19	棟札・墨書
20	扁額



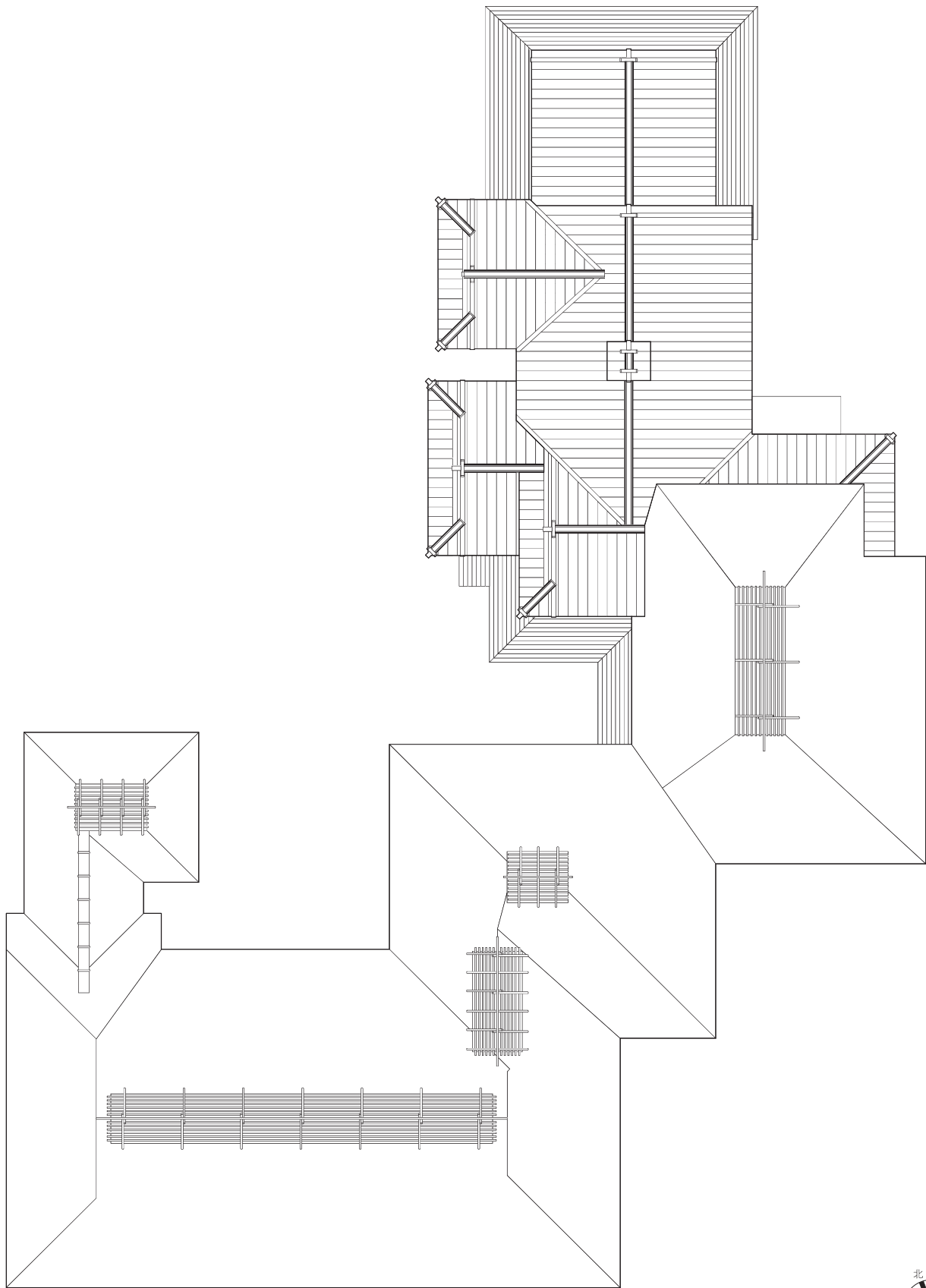
1 配置図



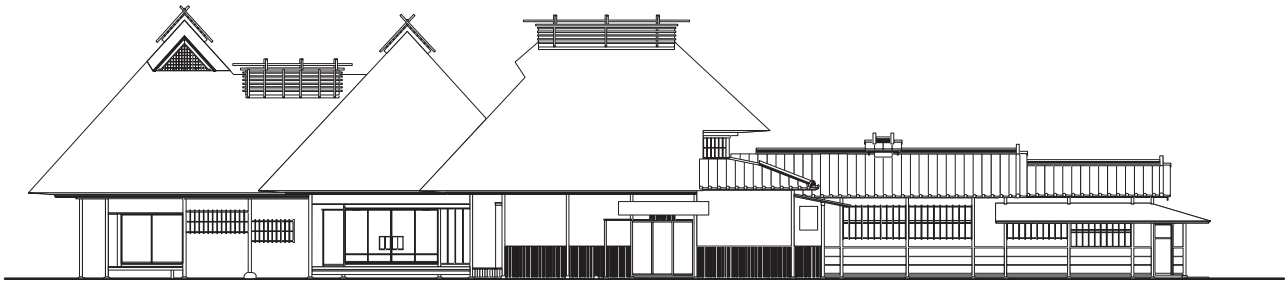


4 主屋 痕跡図 (内法)

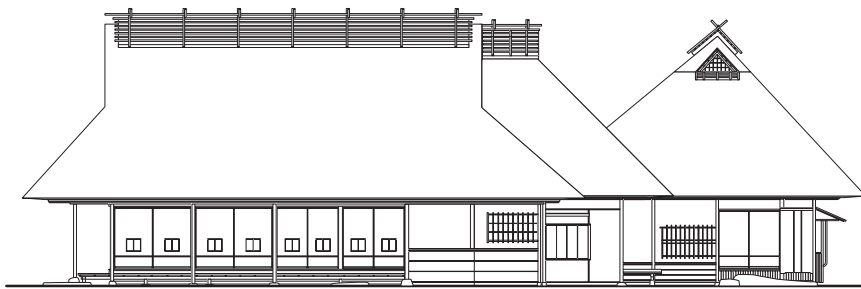
令和5年3月20日現在



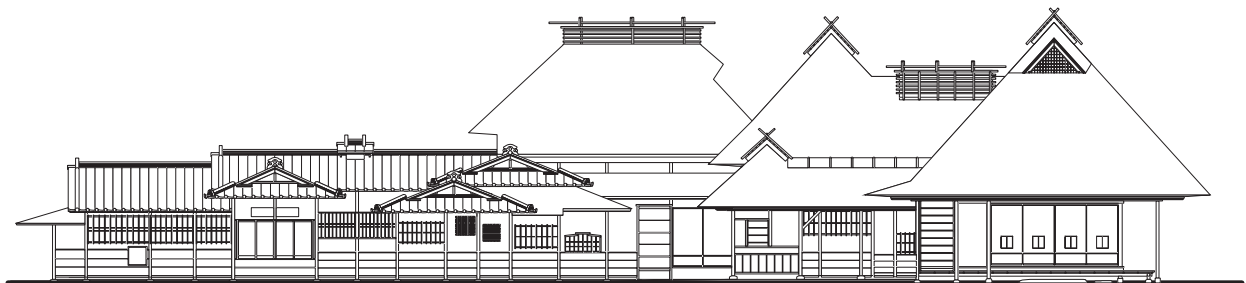
0 1 2 3 4 5m
6 主屋 屋根伏図



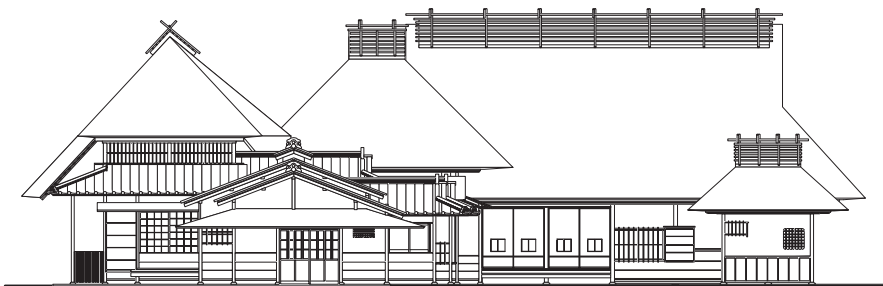
東側立面図



南側立面図



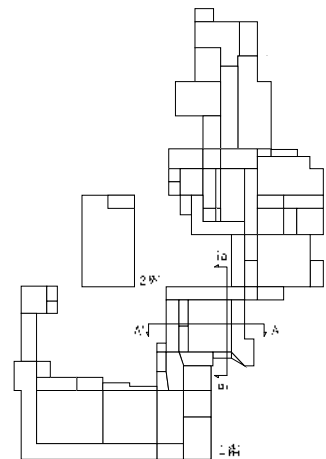
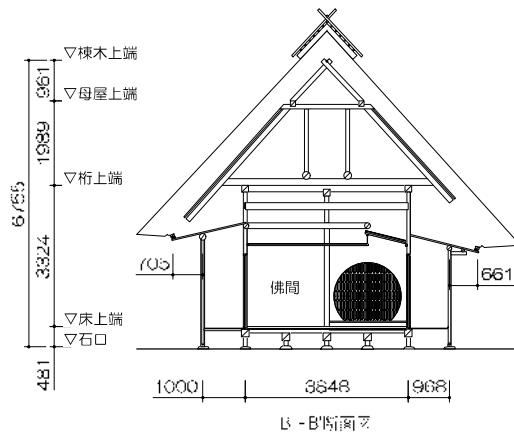
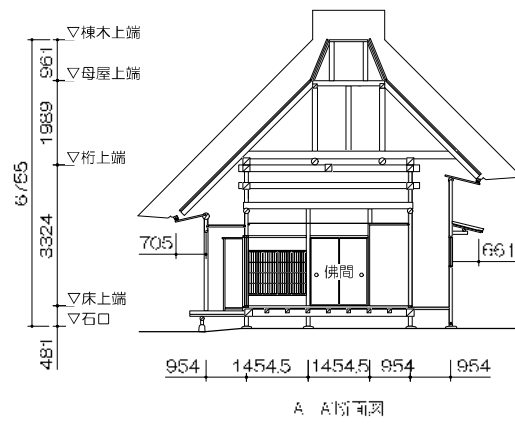
西側立面図



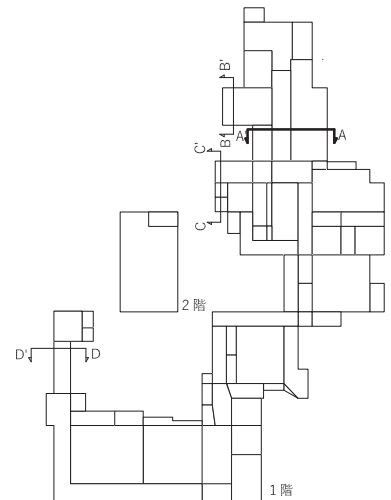
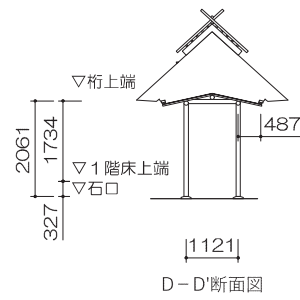
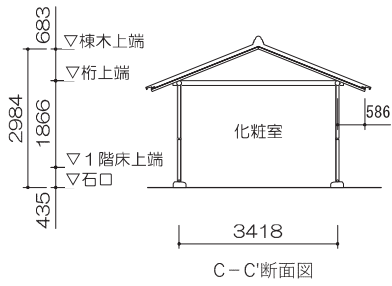
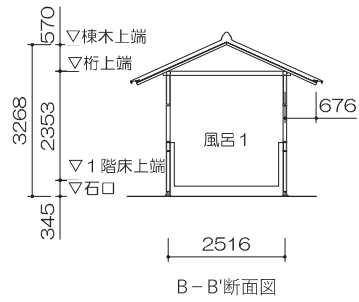
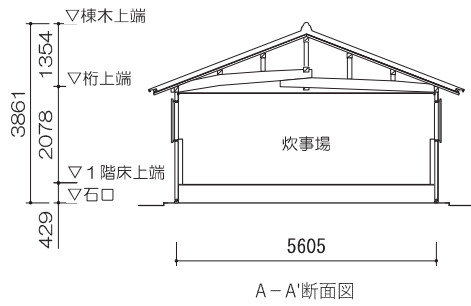
北側立面図



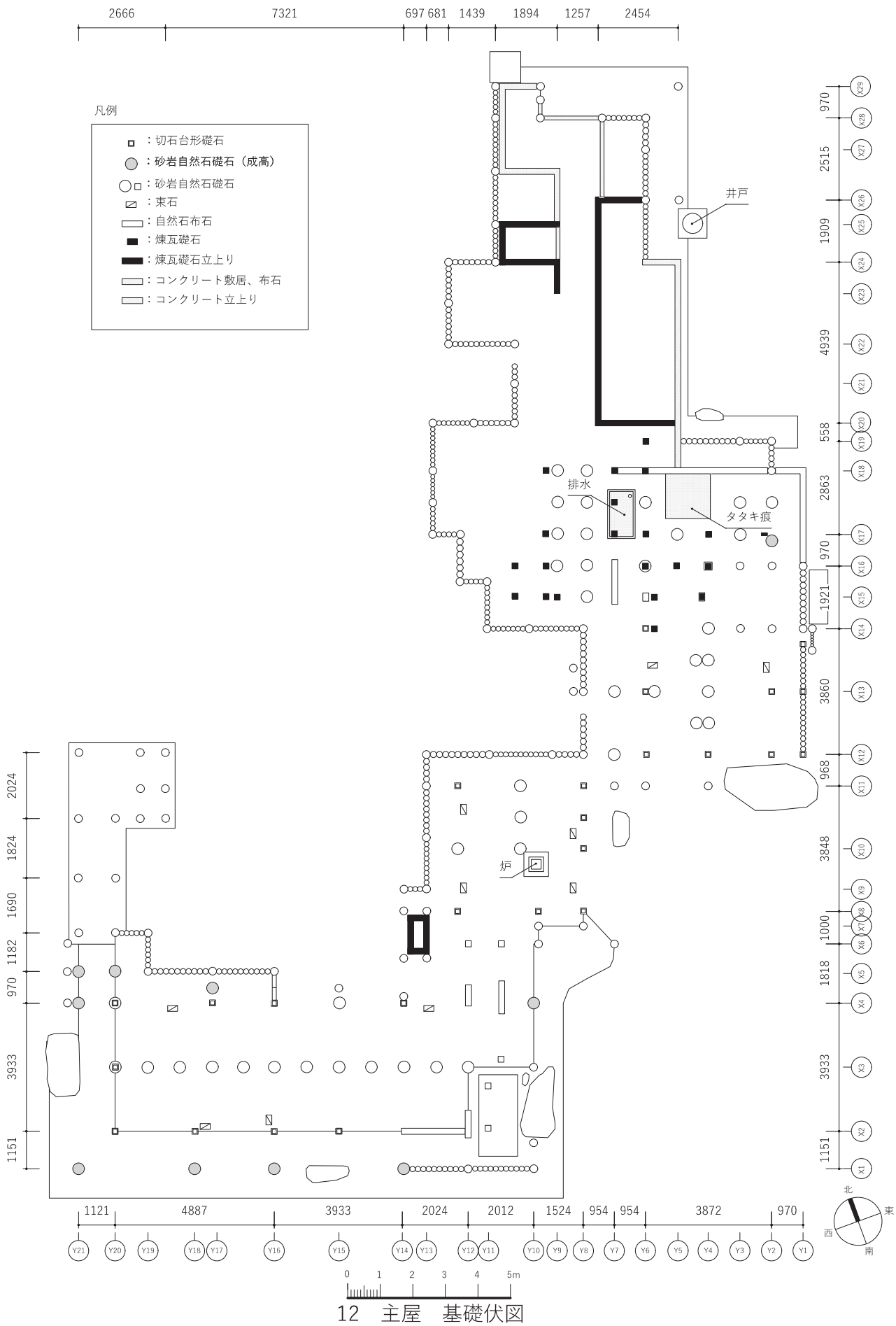
7 主屋 立面図

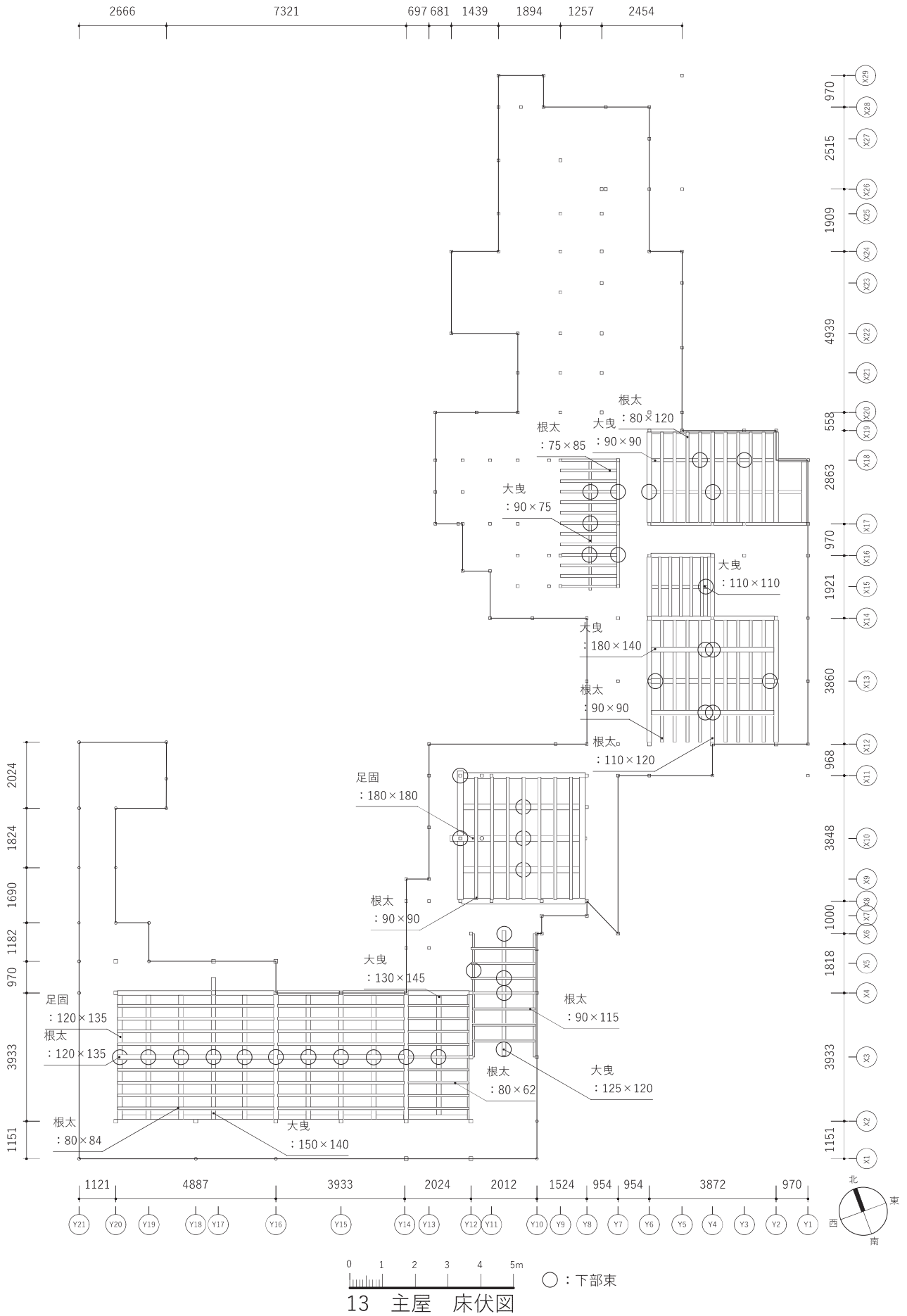


8 主屋 佛間棟 断面図

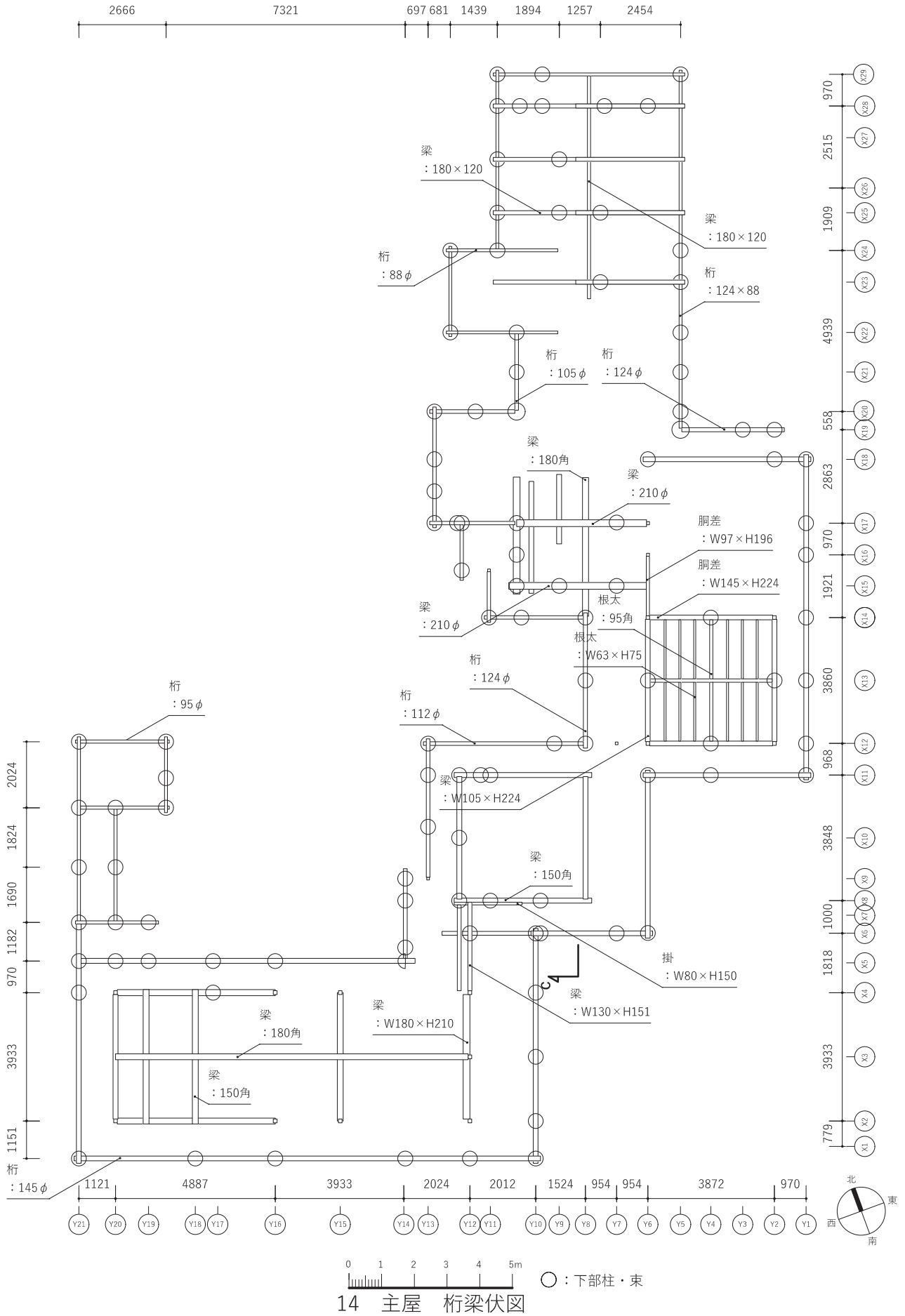


11 主屋 炊事棟・便所棟 断面図

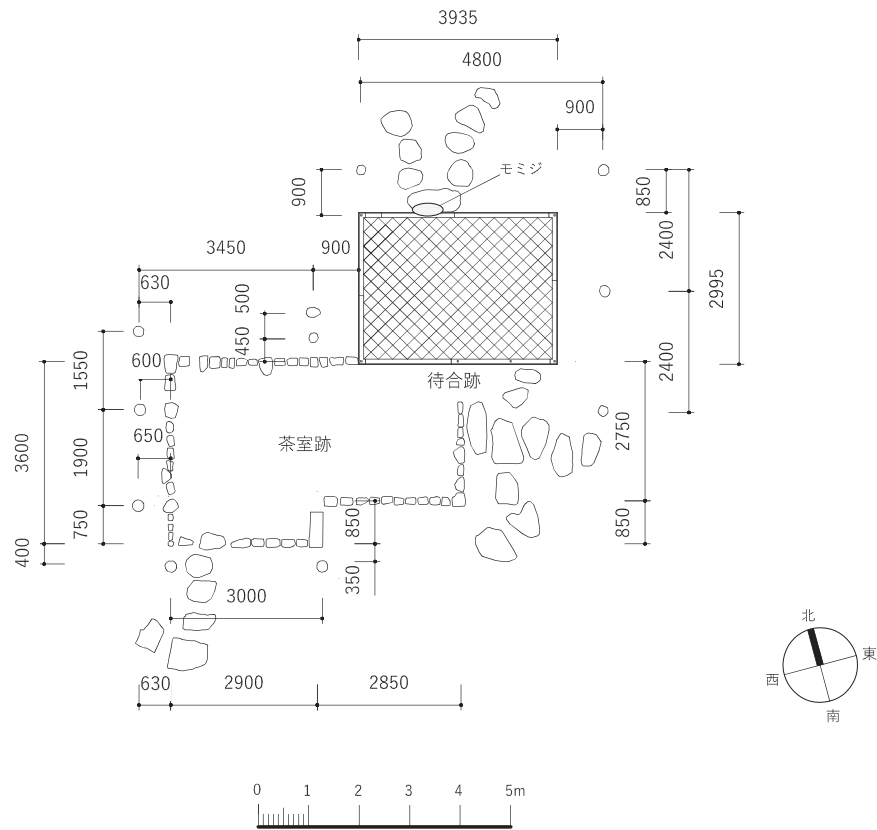




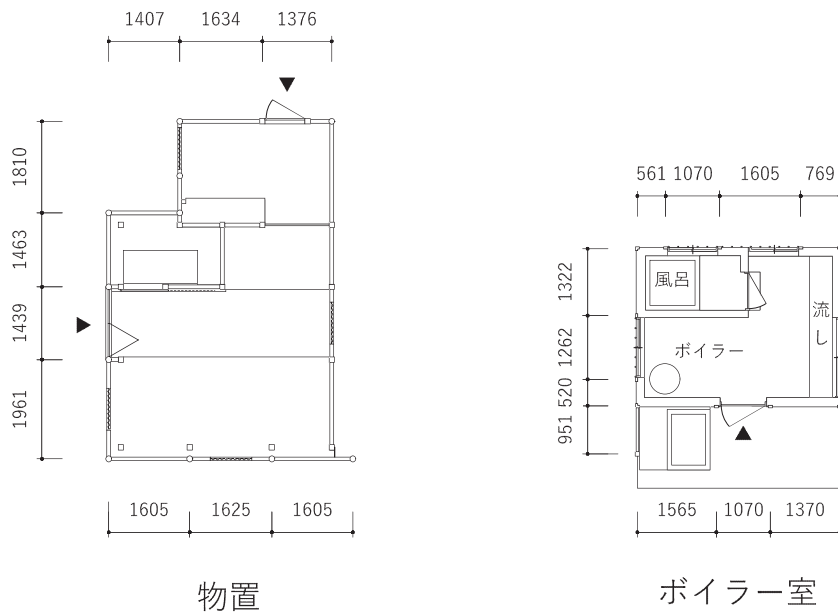
13 主屋 床伏図



14 主屋 桁梁伏図



16 茶室跡・待合跡 平面図



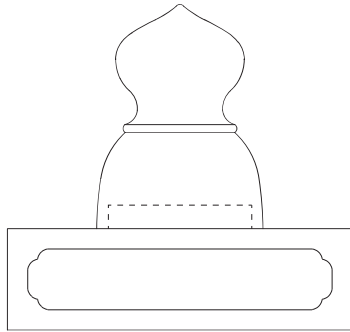
17 物置・ボイラー室 平面図

■宝珠露盤 1

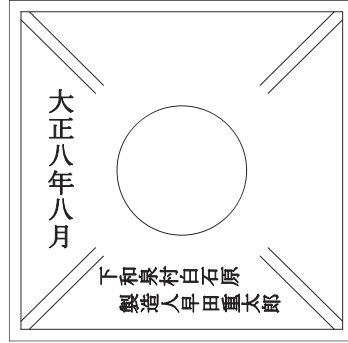
総高〇〇mm 露盤高150mm 総幅510mm

(表面) なし

(裏面) 大正八年八月 下和泉村白石原 製造人早田重太郎



正面図



平面図 (裏)



正側面



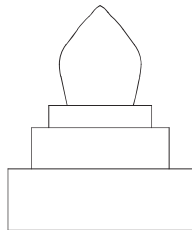
裏面

■宝珠露盤 2

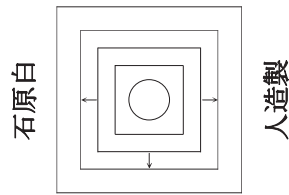
総高333mm 露盤高185mm 総幅273mm

(表面) なし

(裏面) 製造人 永富弥三郎 白原石



正面図



郎三弥富永

平面図 (裏)



正側面



裏面



18 宝珠露盤

■地棟木下端墨書

下端90mm 大鉋 杉材

明治二十五年第五月十一日建之伊丹別荘 大工吉田文八 家造 橋本淺吉

■棟札 客間梁上端打付け(裏面不明)

総高942mm 上幅117mm 下幅115mm 上厚10mm 下厚10mm 丸釘2本 大鉋仕上げ 檜材

大正九年伊丹彌太郎氏改造

昭和五十一年四月
倉田浩平 吉田
書之

■棟札 客間梁東面打付け(裏面不明)

総高2006mm 脇高1980mm 上幅105mm 下幅118mm 上厚10mm 下厚9mm 丸釘3本 大鉋仕上げ 檜材

昭和三十五年二月倉田泰藏この地を求む

工学博士 森羅先生
兼村道園(家忠) 兼村五三郎師

監修のもとに庭園造作家屋一部新築昭和三十七年五月完成す

昭和五十一年四月吉日
倉田浩平書之

■棟札 客間牛梁打付け(裏面不明)

総高1930mm 脇高1903mm 上幅117mm 下幅115mm 上厚10mm 下厚10mm 丸釘3本 大鉋仕上げ 檜材

奉鎮

屋船久々能知神 手置帆負神
産土神 昭和五十一年四月吉日
屋船豊受姫神 彦狭知神

葦葺総屋根替 家主

倉田泰藏九十一才
倉田浩平五十二才

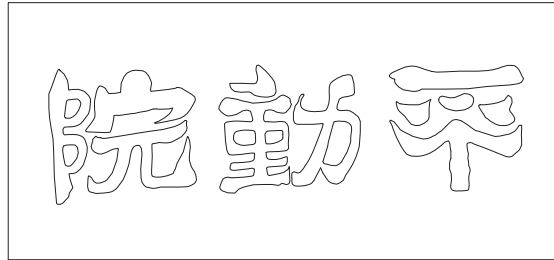
吉岡昭三 高柳善磨 古賀作松
屋根葺 吉岡晴見 森 亮市 山中啓男 一九七七年
大工 吉岡忠太 倉田浩平書之
監督 青木定次郎 日中 隆 吉岡忠久 四月吉日



19 棟札・墨書

■「不動院」扁額

総高535mm 総幅1150mm 厚29mm 胴縁幅68mm 厚24mm
(表面) 不動院
(裏面) なし



正面図



表面



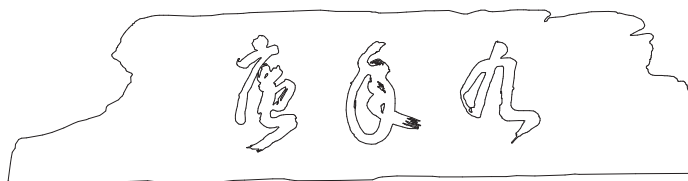
裏面

■「九年庵」扁額

総高390mm 総幅1530mm 厚40mm

(表面) 九年庵

(裏面) 大正八己未初冬 芦田好彫之



正面図



表面



裏面



裏面



裏面

(2) 茶室部材等調査

物置、主屋居間棟2階に茶室解体部材と想定される部材、内部が不明である長持が複数保管されていたため、令和4年(2022)11月25日に目視による現地調査を実施した。

1) 物置

- ・発見された部材：丸太柱、丸桁、敷居、鴨居、梁材、庇部分（コケラ葺、竹）、竹、檜皮材
- ・発見された史料：宝珠露盤2個（図面参照）、定規
- ・番付：組み合わせ番付が複数部材にみられた。

い六（丸桁ほぞ）、い六・い八（繋ぎ梁側面）、い九（丸桁ほぞ）、は一（梁）
 ほ六（丸桁側面）、ほ九（丸桁ほぞ）、ほ六（梁側面）、ち壱（柱ほぞ）

番付発見箇所

	一、壱	二	三	四	五	六	七	八	九
い						丸桁		繋ぎ梁	丸桁
ろ									
は	梁								
に									
ほ						丸桁、梁			
へ									
と									
ち	柱								



丸太柱、丸桁、桔木



梁



敷居、鴨居



丸桁（柱ほぞ）



杉皮材



定規



番付「い六」



番付「い八」



番付「い九」「ほ九」

2) 主屋居間棟2階

- ・発見された部材：丸太柱、束、丸桁、階段手摺笠木、床板、建具（片開き板戸丁番付き、腰付障子戸、障子窓、網戸）、屋根葺材、東門棟瓦、棟瓦、土壁、網戸網材
- ・発見された史料：不動院扁額（図面参照）、地蔵院燭台ほか、定規、定規、出面表、
- ・番付：組み合わせ番付が複数見られた。後年整理作業がなされたようで、組み合わせ番付を記したテープを巻いた部材が複数見られた。

ろ二（丸太柱ほぞ）、い二（丸桁）、キ2（竹）、は四（竹）



丸桁ほか



天井板、竹、建具、網戸網ほか



床板



階段手摺笠木



建具



屋根葺材



定規



出面表



東門棟瓦



棟瓦



地蔵院燭台ほか



番付「ろ二」



番付「は四」

(3) 植生調査

1) 高木類

NO	名称	形状寸法			
		幹周		樹高 m	葉張 m
		cm	株立		
1	モミジ	63		7.0	6.0
2	ヤブツバキ	29		4.0	3.0
3	サカキ	34		4.0	3.0
4	イヌマキ	27		3.0	1.5
5	イヌマキ	12		2.5	1.0
6	イヌマキ	16		2.5	1.5
7	モミジ	78		7.0	8.0
8	モミジ	24.5		4.5	3.0
9	モミジ	52		5.5	4.0
10	サルスベリ	58		5.0	4.0
11	モミジ	45		7.5	3.0
12	モミジ	77		8.0	5.0
13	モミジ	77	○	4.5	6.0
14	イヌマキ	27	○	2.5	2.0
15	イヌマキ	29		2.5	1.0
16	イヌマキ	20		2.0	1.0
17	モミジ	60		5.5	4.5
18	モミジ	24		6.0	3.0
19	モミジ	33		4.5	4.0
20	モミジ	51		3.5	4.0
21	イヌマキ	41		3.0	1.5
22	イヌマキ	29		3.5	1.0
23	イヌマキ	40		3.5	1.5
24	イヌマキ	33		3.0	1.5
25	イヌマキ	22		2.0	1.0
26	イヌマキ	42		3.5	2.0
27	イヌマキ	31		2.5	1.5
28	モミジ	66		6.0	3.5
29	シャシャンボ	37	○	2.5	4.0
30	サカキ	54		5.0	2.5
31	マユミ	32		2.5	3.0
32	ツバキ	36	○	5.0	4.0
33	モミジ	53		6.0	4.0
34	ギンモクセイ	62	○	6.0	2.5
35	ギンモクセイ	85	○	6.0	2.0
36	アカマツ	36		5.0	2.0
37	モミジ	40	○	6.0	5.0
38	シャシャンボ	102	○	6.0	4.5
39	キンモクセイ	61	○	5.0	2.0
40	モミジ	73		5.5	5.0
41	モミジ	53		2.0	2.0
42	ドウダンツツジ			1.5	2.5
43	ドウダンツツジ			3.0	2.5
44	マユミ			3.0	2.5
45	モミジ	66		6.0	4.5
46	モミジ	35		4.0	3.0
47	イヌマキ	41		5.0	1.5
48	ドウダンツツジ			3.0	2.0
49	マユミ	32		4.5	3.5
50	モミジ			6.0	3.0
51	モミジ	56		5.0	4.0
52	モミジ	60		4.5	4.0
53	モミジ	34		4.5	3.0
54	モミジ	43		4.0	3.0

NO	名称	形状寸法			
		幹周		樹高 m	葉張 m
		cm	株立		
55	モミジ	27		2.0	3.5
56	モミジ	74	○	15.0	4.0
57	モミジ	76	○	5.5	5.0
58	シャクナゲ			2.0	4.0
59	モミジ	41		5.5	4.0
60	モミジ	30		1.5	1.5
61	モミジ	49		5.0	5.0
62	モミジ	47		4.5	3.0
63	モミジ	26		1.5	1.0
64	モミジ	56		6.5	5.0
65	モミジ	55		5.0	4.0
66	モミジ	110		9.0	6.0
67	アラカン	122	○	13.0	8.0
68	モミジ	28		4.0	3.0
69	モミジ	72		8.0	4.0
70	モミジ	70		8.0	6.5
71	モミジ	52		5.0	4.0
72	モミジ	74		5.0	6.0
73	ドウダンツツジ	45	○	5.0	3.0
74	モミジ	57		4.5	5.0
75	モミジ	75		4.0	4.0
76	モミジ	51		3.0	3.0
77	モミジ	54		4.0	4.0
78	モミジ	69		5.0	4.5
79	モミジ	64		4.0	4.0
80	モミジ	65		4.0	3.0
81	モミジ	51		4.0	2.0
82	モミジ	55		4.0	2.5
83	モミジ	80		6.0	4.0
84	モミジ	89		7.0	5.0
85	モミジ	65		7.0	6.0
86	ドウダンツツジ	61	○	4.0	5.0
87	イヌマキ	27		4.0	1.0
88	モミジ	20		2.5	1.5
89	イヌマキ	37		4.5	1.5
90	モミジ	74		4.0	1.0
91	モミジ	57		5.0	4.0
92	モミジ	57		6.0	5.0
93	モミジ	62		5.0	4.0
94	イヌマキ	32		2.5	1.5
95	モミジ	65		7.0	3.5
96	ドウダンツツジ		○	2.0	1.5
97	イヌマキ	83		6.0	1.5
98	イヌマキ	44		3.0	1.2
99	イヌマキ	88		7.0	2.0
100	イヌマキ	31		3.0	0.8
101	イヌマキ	76		7.0	1.5
102	ドウダンツツジ		○	4.0	4.0
103	ギンモクセイ	83	○	5.0	4.0
104	アカマツ	36		2.5	2.0
105	モミジ	72		3.5	4.0
106	ドウダンツツジ		○	3.0	3.5
107	不明			3.5	2.0
108	不明			3.0	1.0

NO	名称	形状寸法			
		幹周		樹高 m	葉張 m
		cm	株立		
109	アセビ		○	3.0	3.0
110	モミジ	115		6.0	6.0
111	モミジ	35		5.0	2.0
112	アラカシ	49	○	4.0	1.8
113	シイ	148	○	4.5	2.0
114	イヌマキ	29		2.5	1.0
115	イヌマキ	42		3.5	1.5
116	イヌマキ	23		2.0	1.0
117	イヌマキ	45		3.5	1.5
118	イヌマキ	32		3.0	1.5
119	イヌマキ	33		3.5	1.0
120	イヌマキ	38		2.0	2.0
121	キンモクセイ		○	3.0	1.5
122	ヒイラギモクセイ		○	2.5	1.5
123	モミジ			1.5	0.8
124	モミジ	55		3.0	2.0
125	モミジ			2.5	1.0
126	クロマツ	20		3.0	1.0
127	モミジ	73		2.5	4.0
128	モミジ	76		4.0	5.0
129	モミジ	53		2.5	1.5
130	タギョウシヨウ	58		2.5	2.5
131	モミジ	52		4.5	3.0
132	イヌマキ	34		3.0	1.0
133	キンモクセイ		○	3.5	2.0
134	モミジ	49		5.0	4.0
135	モミジ	63		6.0	6.0
136	モミジ	64		5.0	4.0
137	モミジ	54		5.0	4.0
138	ドウダンツツジ		○	3.0	2.0
139	ベニカナメモチ		○	4.0	1.5
140	ベニカナメモチ		○	3.0	1.0
141	モミジ	55		7.0	5.0
142	キンモクセイ	58		4.5	3.0
143	イヌマキ	35		3.5	1.5
144	スギ	143		14.0	4.0
145	モミジ	49		7.0	4.0
146	モミジ	61		10.0	5.0
147	イヌマキ	37		7.0	2.0
148	モミジ	30		6.0	4.0
149	モミジ	59		10.0	4.0
150	モミジ	11		4.0	3.0
151	モミジ	58		6.0	5.0
152	モミジ	26		6.0	4.0
153	モミジ	61		5.0	4.0
154	モミジ	62		6.0	3.0
155	モミジ	47		4.0	3.0
156	マユミ			2.0	1.0
157	ネズミモチ			2.5	2.0
158	マユミ			2.0	1.0
159	マユミ			2.0	1.2
160	モミジ	20		4.5	2.0
161	モミジ	61		8.0	5.0
162	マユミ	55	○	5.0	3.0
163	マユミ	33		4.0	2.0
164	モミジ	64		6.5	4.0
165	モミジ	68		6.0	4.0
166	モミジ	65		4.0	4.0

NO	名称	形状寸法			
		幹周		樹高 m	葉張 m
		cm	株立		
167	モミジ	53		3.5	3.0
168	モミジ	85		4.5	4.0
169	モミジ	62		4.5	4.0
170	モミジ	32		4.0	1.5
171	モミジ・マユミ			3.0	3.0
172	スダジイ	186		5.0	3.5
173	モミジ	61		6.0	3.0
174	モミジ	51		6.0	4.0
175	モミジ	66		5.0	4.0
176	モミジ	56		6.0	4.0
177	モミジ	100		7.0	5.0
178	ドウダンツツジ			4.0	4.0
179	モミジ	52		6.0	4.0
180	モミジ	33		6.0	3.0
181	イヌマキ	29		3.0	1.5
182	イヌマキ	32		3.0	1.5
183	イヌマキ	18		2.5	0.8
184	モミジ	69		7.0	6.0
185	モミジ	96		9.0	8.0
186	モミジ	70		4.0	6.0
187	マユミ	47		4.0	3.0
188	イヌマキ	30		3.0	1.0
189	イヌマキ	30		2.5	1.0
190	エノキ	127		16.0	10.0
191	モミジ	78	○	7.0	7.5
192	イヌマキ	30		4.0	1.0
193	ドウダンツツジ			4.0	4.0
194	クヌギ	111	○		
195	シイノキ	181		5.0	3.0
196	モミジ	48		4.0	3.0
197	モミジ	27		4.0	3.0
198	アカマツ	41		2.5	2.0
199	モミジ	20		3.0	2.0
200	モミジ	74	○	4.0	6.0
201	シキミ	59	○	6.0	3.0
202	ツバキ	74	○	5.0	4.0
203	イヌマキ	23		1.5	1.5
204	クロマツ	30		3.5	1.5
205	サクラ		○	3.0	1.5
206	シャシャンボ	91	○	5.0	3.0
207	モミジ	60	○	4.0	3.0
208	アオギリ	61		3.0	1.0
209	アカマツ	35		4.0	1.5
210	シャシャンボ	27		3.0	1.5
211	カイズカイブキ	69		3.0	3.0
212	クロマツ	23		2.0	1.5
213	クロマツ	13		1.8	1.0
214	イヌマキ	50		3.5	1.5
215	キンモクセイ	35	○	2.5	1.5
216	サザンカ	36	○	2.5	1.0
217	イヌマキ	28		3.0	1.5
218	イヌマキ	32		2.0	1.0
219	イヌマキ	31		4.0	1.5
220	イヌマキ	41		4.0	1.5
221	モミジ	57		11.0	5.0
222	モミジ	90		12.0	7.0
223	モミジ	73		10.0	6.0
224	モミジ	80		13.0	6.0

NO	名称	形状寸法			
		幹周		樹高	葉張
		cm	株立		
225	モミジ	43		6.0	5.0
226	モミジ	18		3.0	4.0
227	モミジ	44	○	12.0	5.0
228	モミジ	48		12.0	6.0
229	モミジ	51		9.0	3.0
230	モミジ	38		6.0	5.0
231	モミジ	54		12.0	5.0
232	モミジ	15		4.5	1.0
233	モミジ	43	○	5.0	5.0
234	モミジ	18		3.0	3.0
235	モミジ	104		8.0	7.0
236	モミジ	40		6.5	4.0
237	モミジ	63		7.0	5.0
238	モミジ	33		4.0	3.0
239	モミジ	35		6.0	3.0
240	モミジ	36		1.0	4.0
241	モミジ	61		7.0	6.0

NO	名称	形状寸法			
		幹周		樹高	葉張
		cm	株立		
242	モミジ	70		7.0	4.0
243	モミジ	67		6.0	6.0
244	モミジ	102		7.0	8.0
245	モミジ	41		5.0	4.0
246	モミジ	32		5.0	4.0
247	モミジ	26		5.0	4.0
248	モミジ	16		2.0	3.5
249	モミジ	39		6.0	4.0
250	モミジ	19		5.0	2.5
251	モミジ	20		2.5	3.5
252	モミジ	11		2.0	1.5
253	モミジ	45	○	6.5	3.5
254	モミジ	64		6.0	5.0
255	モミジ	25		4.5	3.5
256	モミジ	24		2.5	2.0
257	モミジ	92		7.0	5.0
258	モミジ	67	○	8.0	6.0

2) 中・低木類

NO	名称	形状寸法			
		樹形		樹高	葉張
		株立	寄植		
1	サンゴジュ	○		3.0	2.0
2	ヤツデ			1.0	1.0
3	ヒラドツツジ			1.0	1.0
4	サツキツツジ			0.6	0.5
5	サツキツツジ			0.8	1.0
6	サツキツツジ			0.4	0.3
7	サザンカ			1.8	1.2
8	サツキツツジ			0.9	1.0
9	ヒラドツツジ			1.8	1.5
10	サツキツツジ			1.0	1.5
11	ヒラドツツジ			1.2	1.0
12	ヒラドツツジ			1.2	1.0
13	ヒラドツツジ			1.2	1.0
14	ヒラドツツジ			1.5	2.0
15	ヒラドツツジ			1.2	1.0
16	サツキツツジ			0.8	1.5
17	ナンテン			2.0	0.8
18	ナンテン			1.0	0.4
19	クルメツツジ			1.0	0.6
20	ヒサカキ			1.4	0.8
21	ヒサカキ			1.4	1.0
22	ヒサカキ			1.2	0.6
23	ナンテン	○		1.2	0.8
24	ギンモクセイ			1.5	1.0
25	アオキ(斑)			0.8	0.5
26	ヒサカキ			0.6	0.8
27	ナンテン			1.2	0.4
28	クチナシ			1.0	1.0
29	ナンテン	○		1.2	1.0
30	サツキツツジ			0.5	0.5
31	サツキツツジ			0.6	0.6
32	クチナシ			0.8	0.6
33	ヒサカキ			0.6	0.5

NO	名称	形状寸法			
		樹形		樹高	葉張
		株立	寄植		
34	ネズミモチ			0.8	0.6
35	サツキツツジ			0.4	0.4
36	サツキツツジ			0.9	1.0
37	ヒサカキ			1.2	0.8
38	ドウダンツツジ			1.2	0.5
39	ドウダンツツジ			1.0	0.5
40	イヌツゲ			0.4	1.0
41	ヒサカキ			1.0	0.8
42	ヒサカキ			1.2	0.8
43	ヒサカキ			0.6	0.5
44	ヒサカキ			0.8	0.6
45	ナンテン			1.7	0.8
46	ヒサカキ			1.5	1.0
47	シャクナゲ			1.8	2.0
48	イヌツゲ			0.5	0.4
49	サツキツツジ		○	0.8	1.2
50	サツキツツジ			0.6	0.7
51	サツキツツジ		○	0.8	2.0
52	サツキツツジ			0.4	0.6
53	マンリョウ			0.8	0.4
54	サツキツツジ			0.5	0.8
55	サツキツツジ			1.0	1.8
56	ヒサカキ			2.5	1.2
57	トウネズミモチ			4.5	3.0
58	サツキツツジ			0.8	0.8
59	ヒラドツツジ			1.2	1.0
60	クチナシ			2.0	1.5
61	サツキツツジ			1.2	1.5
62	ヒサカキ			0.5	0.5
63	ヒサカキ			0.5	0.4
64	ヒラドツツジ			1.2	1.5
65	ヒラドツツジ			1.2	1.2
66	サツキツツジ			1.0	0.8

NO	名称	形状寸法			
		樹形		樹高	葉張
		株立	寄植	m	m
67	サツキツツジ			0.6	0.5
68	サツキツツジ			0.8	0.4
69	ヒサカキ			0.5	0.5
70	クルメツツジ			1.0	0.3
71	クルメツツジ			1.2	6.0
72	クルメツツジ			1.0	0.4
73	ヒラドツツジ			1.5	1.2
74	クルメツツジ			1.5	1.0
75	ヒラドツツジ			1.8	1.8
76	ヒラドツツジ			1.5	1.2
77	クルメツツジ			1.5	1.0
78	クルメツツジ			1.2	1.0
79	ドウダンツツジ			0.5	0.5
80	サツキツツジ			0.7	0.5
81	サツキツツジ			1.0	1.2
82	ドウダンツツジ		○	0.8	1.2
83	ヒラドツツジ			1.0	1.8
84	サツキツツジ			0.8	1.0
85	ドウダンツツジ		○	0.6	1.2
86	サツキツツジ		○	0.8	1.5
87	イヌツゲ			0.5	0.6
88	サツキツツジ			1.2	1.5
89	サツキツツジ			0.8	1.0
90	ヒラドツツジ			0.5	0.8
91	サツキツツジ			0.5	0.5
92	サツキツツジ			0.8	1.0
93	サツキツツジ			0.8	1.0
94	サツキツツジ			0.8	1.1
95	サツキツツジ			0.8	1.0
96	ヒラドツツジ			1.3	1.5
97	サツキツツジ			1.0	0.8
98	ヒラドツツジ			1.5	1.5
99	ヒラドツツジ			1.4	1.5
100	サツキツツジ			1.2	1.5
101	ヒサカキ			0.7	0.6
102	ヒラドツツジ		○	1.5	2.0
103	クルメツツジ			1.7	1.2
104	不明			1.2	0.8
105	ヒサカキ			0.8	0.5
106	ヒサカキ			0.8	0.5
107	ヒラドツツジ			1.5	2.0
108	ヒサカキ			0.5	0.6
109	ヒラドツツジ			1.4	2.0
110	ネズミモチ			1.2	1.0
111	クチナシ			1.2	1.0
112	ヒラドツツジ			1.0	1.0
113	サツキツツジ		○	1.0	1.8
114	サツキツツジ			0.4	0.4
115	サツキツツジ			0.5	0.7
116	ドウダンツツジ			1.0	1.0
117	サツキツツジ			0.8	1.0
118	サツキツツジ			1.2	1.5
119	サツキツツジ			1.2	1.5
120	ナンテン			1.7	0.8
121	ドウダンツツジ			0.6	0.7
122	サツキツツジ		○	0.6	0.5
123	ヒラドツツジ			1.5	1.2
124	ナンテン			2.0	1.0

NO	名称	形状寸法			
		樹形		樹高	葉張
		株立	寄植	m	m
125	サツキツツジ			0.5	0.6
126	サツキツツジ			0.6	0.5
127	サツキツツジ			0.7	0.7
128	サツキツツジ			0.7	0.6
129	ヒラドツツジ			1.7	1.5
130	ヒサカキ			0.6	0.4
131	ヒラドツツジ			1.5	1.2
132	ナンテン			0.8	0.6
133	ヒラドツツジ			1.4	1.0
134	クルメツツジ			1.2	0.8
135	アラカシ			1.0	1.2
136	アカガシ			1.4	1.2
137	クチナシ			2.2	1.8
138	トウネズミモチ			3.0	2.5
139	サンゴジュ			1.5	1.0
140	ヒサカキ			1.5	1.2
141	ヒサカキ			0.8	0.4
142	ヒサカキ			0.8	0.4
143	ヒラドツツジ			0.8	0.5
144	ヒサカキ			0.8	0.5
145	ヒラドツツジ			1.8	2.0
146	ドウダンツツジ			0.8	0.8
147	ドウダンツツジ			1.0	1.0
148	ドウダンツツジ			0.8	0.8
149	クルメツツジ			1.4	0.8
150	ドウダンツツジ			0.8	0.5
151	クルメツツジ			1.8	1.0
152	クルメツツジ			1.0	0.5
153	クルメツツジ			1.5	0.8
154	クルメツツジ			1.5	0.8
155	イヌツゲ			0.4	0.3
156	クルメツツジ			0.7	0.4
157	クルメツツジ			1.4	1.0
158	イヌツゲ			1.0	0.8
159	クルメツツジ			1.2	1.0
160	クルメツツジ			1.0	0.8
161	ヒサカキ			1.0	0.4
162	シャシャンボ			0.5	0.6
163	ヒサカキ			1.0	0.8
164	クルメツツジ			1.2	0.4
165	クルメツツジ			1.0	0.3
166	クルメツツジ			1.4	1.2
167	クルメツツジ			1.4	1.2
168	ヒサカキ			0.8	0.6
169	クルメツツジ			0.8	0.6
170	クルメツツジ			0.8	0.8
171	サツキツツジ			0.8	0.6
172	クルメツツジ			1.0	0.8
173	クルメツツジ			1.2	1.0
174	クルメツツジ			0.8	0.5
175	ヒサカキ			0.5	0.4
176	クルメツツジ			1.5	1.0
177	クルメツツジ			1.2	1.0
178	クルメツツジ			0.4	0.4
179	クルメツツジ			1.0	0.3
180	クルメツツジ			1.2	0.8
181	クルメツツジ			1.2	0.8
182	ヒラドツツジ			1.0	0.8

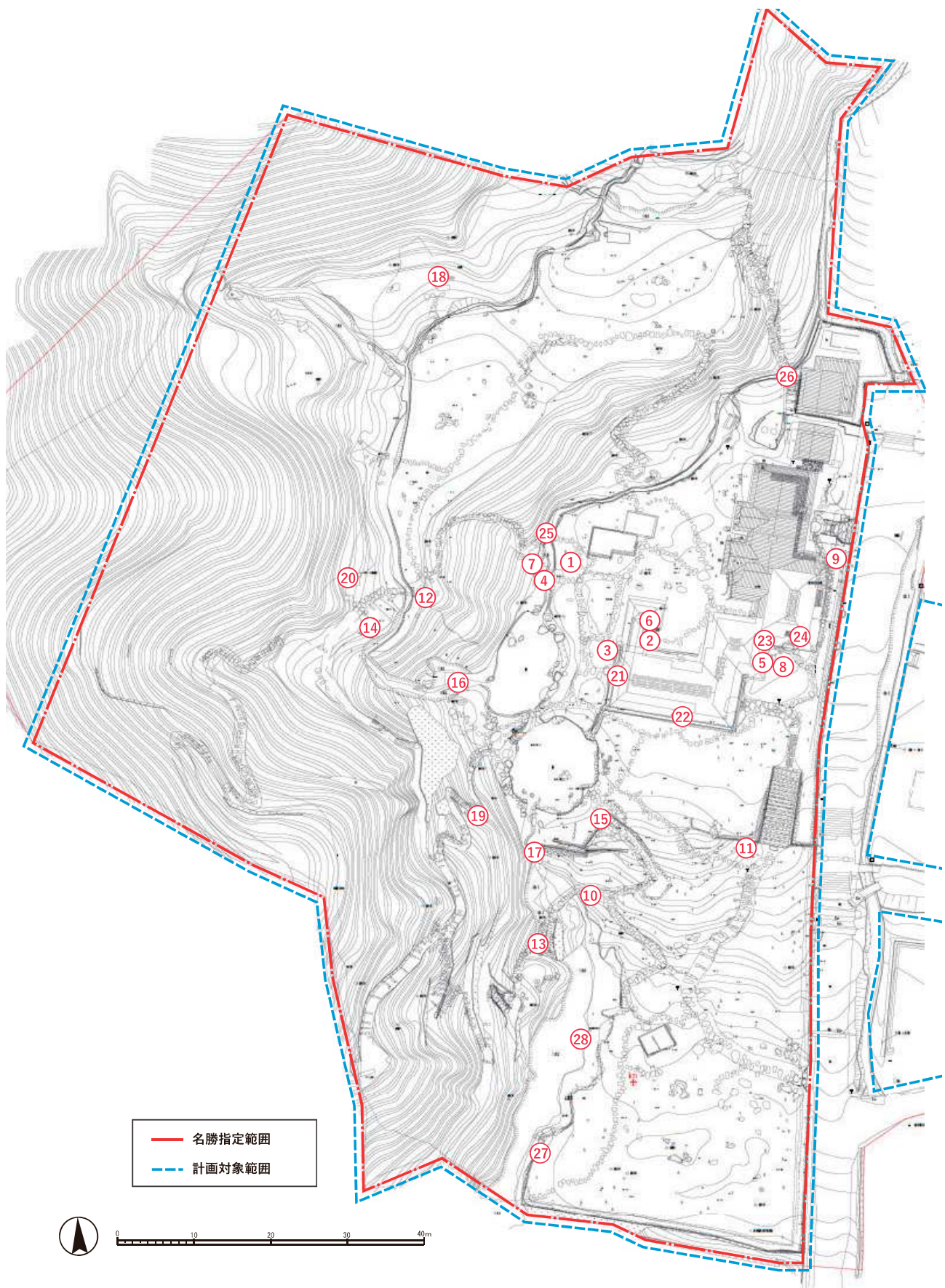
NO	名称	形状寸法			
		樹形		樹高 m	葉張 m
		株立	寄植		
183	ヒラドツツジ			1.2	1.0
184	クメツツジ			1.2	1.0
185	ヒサカキ			0.8	0.6
186	ヒラドツツジ			1.2	1.5
187	ドウダンツツジ			0.8	1.0
188	クメツツジ			1.2	0.8
189	ヒラドツツジ			1.0	1.2
190	クメツツジ			0.8	0.5
191	クメツツジ			0.8	0.7
192	クメツツジ			1.0	0.4
193	クメツツジ			1.2	1.0
194	クメツツジ			1.0	0.8
195	ヒサカキ			0.8	0.8
196	ヒサカキ			0.6	0.4
197	ヒサカキ			0.7	0.6
198	ヒラドツツジ		○	1.8	4.0
199	クメツツジ			1.2	0.8
200	ヒサカキ			0.8	0.6
201	ヒサカキ			0.5	0.5
202	ヒサカキ			0.7	0.5
203	イヌツゲ			0.5	0.6
204	ヒラドツツジ			0.8	0.8
205	ヒラドツツジ			1.2	2.0
206	クメツツジ			1.4	1.0
207	クメツツジ			1.1	1.0
208	ヒサカキ			1.0	0.7
209	ヒラドツツジ			1.8	2.0
210	ヒラドツツジ			1.6	1.5
211	ウメモドキ			1.4	0.3
212	ヒサカキ			0.7	0.5
213	ヒラドツツジ			1.4	2.0
214	クメツツジ			0.5	0.3
215	ヒラドツツジ		○	0.7	1.0
216	ヒラドツツジ			1.0	0.8
217	ヒラドツツジ			1.8	2.0
218	ヒラドツツジ			1.0	1.0
219	ヒラドツツジ			1.6	1.6
220	ヒラドツツジ			2.0	1.8
221	イヌツゲ			0.6	0.6
222	イヌツゲ			0.7	0.8
223	イヌツゲ			0.3	0.3
224	イヌツゲ			0.4	0.3
225	ヒサカキ			0.8	0.6
226	クメツツジ			1.0	1.0
227	ヒラドツツジ			1.2	0.8
228	ヒラドツツジ			1.0	0.8
229	ヒラドツツジ			1.0	1.7
230	クメツツジ			0.8	0.7
231	イヌツゲ			1.0	1.0
232	ヒラドツツジ			1.2	1.2
233	クメツツジ		○	1.0	1.2
234	ヒラドツツジ			1.2	1.8
235	クメツツジ			1.0	0.8
236	イヌツゲ			0.7	0.7
237	イヌツゲ			1.4	1.2
238	イヌツゲ			1.1	1.0
239	サツキツツジ		○	0.3	0.8
240	ヒサカキ			0.8	0.7

NO	名称	形状寸法			
		樹形		樹高 m	葉張 m
		株立	寄植		
241	サツキツツジ			0.9	1.1
242	イヌツゲ			1.1	1.1
243	ヒラドツツジ			1.0	0.8
244	ヒラドツツジ			1.3	1.6
245	イヌツゲ			0.4	0.3
246	ヒラドツツジ			1.2	1.8
247	ヒラドツツジ			1.5	1.2
248	ヒラドツツジ			1.5	1.5
249	ヒラドツツジ			1.7	1.2
250	ヒラドツツジ			1.4	1.4
251	サツキツツジ		○	0.4	1.0
252	ヒサカキ			0.7	0.5
253	ヒラドツツジ			1.0	0.5
254	ヒラドツツジ			1.5	1.5
255	シャシャンボ			0.9	0.4
256	ヒラドツツジ			0.6	0.4
257	ヒラドツツジ			1.1	1.6
258	ヒサカキ			0.7	0.5
259	クメツツジ			0.4	0.3
260	クメツツジ			0.5	0.4
261	クメツツジ		○	1.4	1.5
262	ヒサカキ			0.5	0.3
263	ヒラドツツジ			1.2	1.2
264	ヒラドツツジ			1.5	1.5
265	ヒサカキ			0.8	0.5
266	ヒラドツツジ			1.2	1.5
267	ヒラドツツジ			1.3	1.5
268	ヒサカキ			0.6	0.5
269	サツキツツジ			1.0	0.8
270	ヒラドツツジ			1.5	2.0
271	イヌツゲ			0.5	0.4
272	ヒサカキ			0.5	0.4
273	ヒラドツツジ			1.3	1.5
274	クメツツジ			0.8	0.4
275	クメツツジ			0.3	0.4
276	ヒラドツツジ			1.0	1.2
277	サツキツツジ			0.6	0.5
278	ヒラドツツジ			1.6	1.5
279	ヒラドツツジ			1.6	1.8
280	サツキツツジ			1.0	1.2
281	クチナシ			3.0	2.0
282	ミミズバイ			2.0	1.2
283	ミミズバイ			2.0	1.2
284	ヤツデ			1.8	0.5
285	クチナシ			1.8	1.5
286	タブノキ			1.5	0.4
287	アオキ			2.0	1.0
288	アオキ			2.0	1.5
289	アオキ			3.0	2.0
290	アオキ			3.5	2.5
291	ヤツデ			1.5	0.4
292	アオキ			3.0	1.5
293	モミジ			3.0	1.5
294	アオキ			3.0	1.5
295	アオキ			3.0	1.5
296	アオキ			3.5	2.5
297	チャ			0.8	0.6
298	アオキ			4.0	3.0

NO	名称	形状寸法			
		樹形		樹高	葉張
		株立	寄植	m	m
299	アオキ			3.0	4.0
300	ヒラドツツジ			1.8	1.5
301	ヒサカキ			0.4	0.2
302	ドウダンツツジ			0.5	0.3
303	ヒサカキ			0.5	0.4
304	ドウダンツツジ			0.5	0.5
305	ヒサカキ			1.1	0.7
306	ドウダンツツジ			1.8	1.5
307	ヒサカキ			1.4	0.8
308	サツキツツジ			1.6	1.6
309	ヒサカキ			0.8	0.3
310	サツキツツジ			0.4	0.3
311	サツキツツジ			0.8	0.6
312	イヌツゲ			0.5	0.4
313	サツキツツジ			1.2	1.5
314	サツキツツジ			0.7	0.5
315	サツキツツジ			1.1	1.0
316	ヒラドツツジ			0.7	0.8
317	クルメツツジ			1.0	0.5
318	サツキツツジ			0.7	0.8
319	サツキツツジ			0.8	0.6
320	ヒサカキ			1.4	0.8
321	ヒラドツツジ			1.6	2.0
322	サツキツツジ			0.8	0.8
323	ヒラドツツジ			1.5	1.5
324	ヒラドツツジ			0.5	0.5
325	ヒラドツツジ			0.6	0.6
326	ヒサカキ			0.5	0.4
327	ヒラドツツジ			0.4	0.4
328	ヒラドツツジ			0.6	0.7
329	サツキツツジ		○	0.6	1.8
330	ヒラドツツジ			1.0	1.4
331	サツキツツジ			0.6	1.0
332	ヒラドツツジ			1.4	1.5
333	ヒラドツツジ			0.6	0.6
334	ヒラドツツジ			0.6	0.6
335	ヒラドツツジ			0.9	0.7
336	ヒラドツツジ			0.8	0.6
337	ヒラドツツジ			0.9	0.9
338	ヒラドツツジ			1.1	1.2
339	ヒラドツツジ			0.7	0.8
340	ヒイラギモクセイ			1.5	1.0
341	ヒラドツツジ			1.4	16.0
342	ヒラドツツジ			0.8	0.7
343	ヒラドツツジ			1.4	1.8
344	サツキツツジ、ドウ ダンツツジ		○	0.6	2.0
345	ヒラドツツジ		○	2.0	2.5
346	クルメツツジ			1.8	1.5
347	クルメツツジ			0.8	0.6
348	サツキツツジ			0.7	1.2
349	シャシャンボ			1.4	0.6
350	ヒラドツツジ			1.6	1.2
351	ヒラドツツジ			1.6	1.2
352	イヌツゲ			0.7	0.5
353	ナンテン			1.7	0.6
354	ヒラドツツジ			1.2	0.8
355	ヒサカキ			1.0	0.6

NO	名称	形状寸法			
		樹形		樹高	葉張
		株立	寄植	m	m
356	イヌツゲ			1.8	1.0
357	アオキ			3.0	1.0
358	アオキ			3.0	1.5
359	アオキ			2.5	1.5
360	アオキ			2.0	1.5
361	不明			1.2	3.0
362	ツバキ			2.0	0.8
363	アオキ			2.5	1.2

(4) 石造物調査



石造物の位置（令和3年（2021）度調査）



①井筒



②蹲踞



③手水-1



④手水-2



⑤手水-3



⑥灯笼-1



⑦灯笼-2



⑧灯笼-3



⑨灯笼-4



⑩灯笼-5



⑪灯笼-6



⑫灯笼-7



⑬灯笼-8



⑭灯笼-9 (倒壊分)



⑮灯笼-10



⑯滝石組-1



⑰滝石組-2



⑱層塔-1



⑲層塔-2



⑳供養塔



㉑沓脱石-1



㉒沓脱石-2



㉓沓脱石-3



㉔沓脱石-4



㉕石橋-1



㉖石橋-2



㉗円形加工石



㉘石灯笼 (倒木により破損)

(5) 石垣調査

九年庵の重要な構成要素として、庭園内、庭園外郭、山林部の各所でみられる石垣がある。これらの石垣は、積み方、石材の種類・加工方法等の諸特徴から、仁比山護国寺に関連する江戸時代の遺構と、近代・現代の庭園の造作における、改造・新造石垣の両者が存在するものと考えられる。ここではまず各所における石垣の現状・特徴・構築時期について整理すると共に、庭園の立地・地形的な特長と石垣との関連について述べる。

■石垣の位置と現状 (図1)

庭園内石垣 (01～09面)

01～04面は上段庭園と下段庭園を結ぶ石段部の石垣で、石段を挟んで、01面と02面からなる東側袖石垣(図3①)と、03面と04面からなる西側袖石垣(図3②)で構成される。02面はさらに庭園外面の15面石垣と角(出角)をもって接続しており、01・02・15面では三方向を石垣で構築する石塁状をなしている。石材は基盤層である花崗岩の野面石で、各面とも加工痕は観察できない。01-02面の隅角部(出角部)における石垣高さは3.3m、角石は築石部(平石部)より大きく横長の石を用いており、左右の控えの長短は不揃いであるものの、左右に角石の長辺を振り分ける「算木積み」を意識した積み方となっている。なお、03-04面からなる隅角部稜線では僅かに反りがみられる。

01～04面のいずれも、築石部で大きさの不揃いな野面石を、基本的に布目崩し積みに積むもので、谷積みや落とし積みは認められない。勾配は01面における階段上部で81度(1.5分[1分5厘])、角に向かって高さが増すと共に少しずつ起きており、隅角部付近では87度(5厘)と、ほぼ直立した状態である。現状では01面において出角より1～3mの範囲で築石部に孕み出しがみられ、石垣面を覆う樹根が支えとなっているのが現状である(図3③)。樹根の腐朽が進むことで崩壊する恐れがあることから、解体修理等の対策を講じる必要がある。

05～09面(図3⑤～⑦)は下段池の南側にあたり、上段庭園と下段庭園の段差を構成する、高さ最大3.5m(09面)の石垣で、09面の西端は岩盤に接している。平面形はやや複雑であり、「折れ」を介して東西に伸びる08-09面上段に、シノギ角(鈍角)に開く05-06面が構築されている。下段となる08-09面は花崗岩の野面石・雑割石を乱積みに積む部分が大半を占め、石材中に小型の矢穴やエンショウノミの加工痕がみられることから近代以降の改修が顕著である。しかし08-09面の隅角部基部には、一部で古い積み方が遺存しているほか(図3⑦)、上段の05-06面のシノギ角では、算木積み状に置く角石の使い方や、角石の短辺を築石面より内側に引く(入れる)「ヤセ角」が認められ、近世に遡る要素が散見される(図3⑥)。

庭園外郭石垣 (10～18面)

現在の庭園の外郭を形作っている石垣で、南面石垣(10・11・12面)と出角を挟んで東面石垣(13～18)が仁比山神社参道に沿って延長117m続いている。南面石垣では、山林部の法面側において高さ最大3.5mに積み上げられ(11面)、下段庭園の水路は、そのままその高低差を落差とする滝となっている。一方南面石垣は、ほぼ中程から東側から二段に別れ、10面から連続する上段石垣を10面、10面石垣の基部から幅2～2.5mの犬走り状の小段を介して続く下段の石垣を12面とする。上段石垣と下段石垣では、前者がやや高く、犬走り状の小段と天端となる下段庭園との比高差は1.6m前後である。勾配は11面で70～75度(3.5分～2.5分)、10面は基本的に81～86度(1.5分～1.0分)と11面より勾配が起きており、11面はわずかに反りを持つように観察されるが、10面は直線勾配である。

なお10・11・12面はいずれも花崗岩の野面石からなり、苔類の被覆により積み方の詳細は不明であるが、概ね布目崩し積みと推測される。なお10面石垣の一部では石垣面の「前倒れ」と築石の「抜け」が認められ、

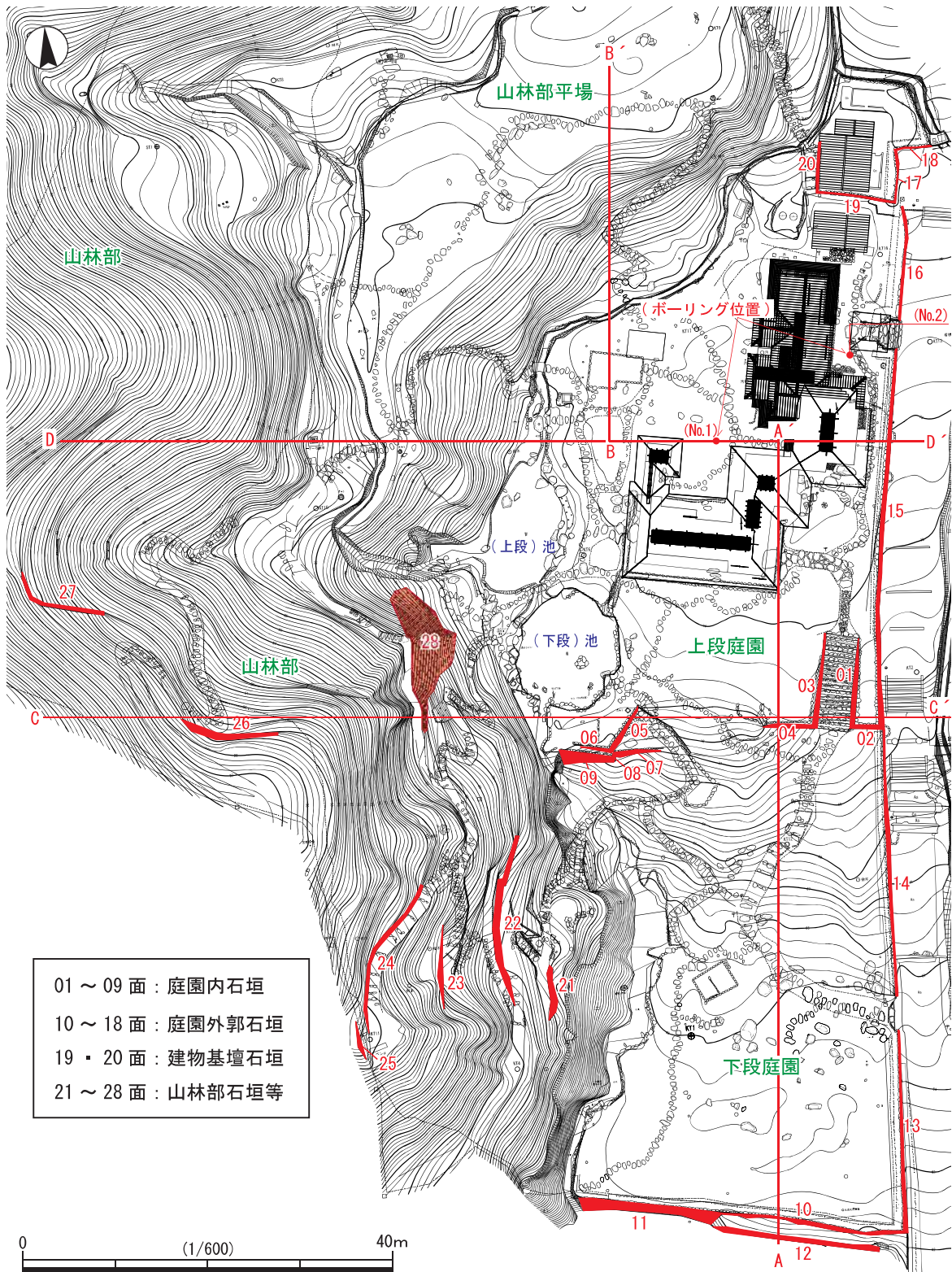


図1 石垣位置図 [1/600]

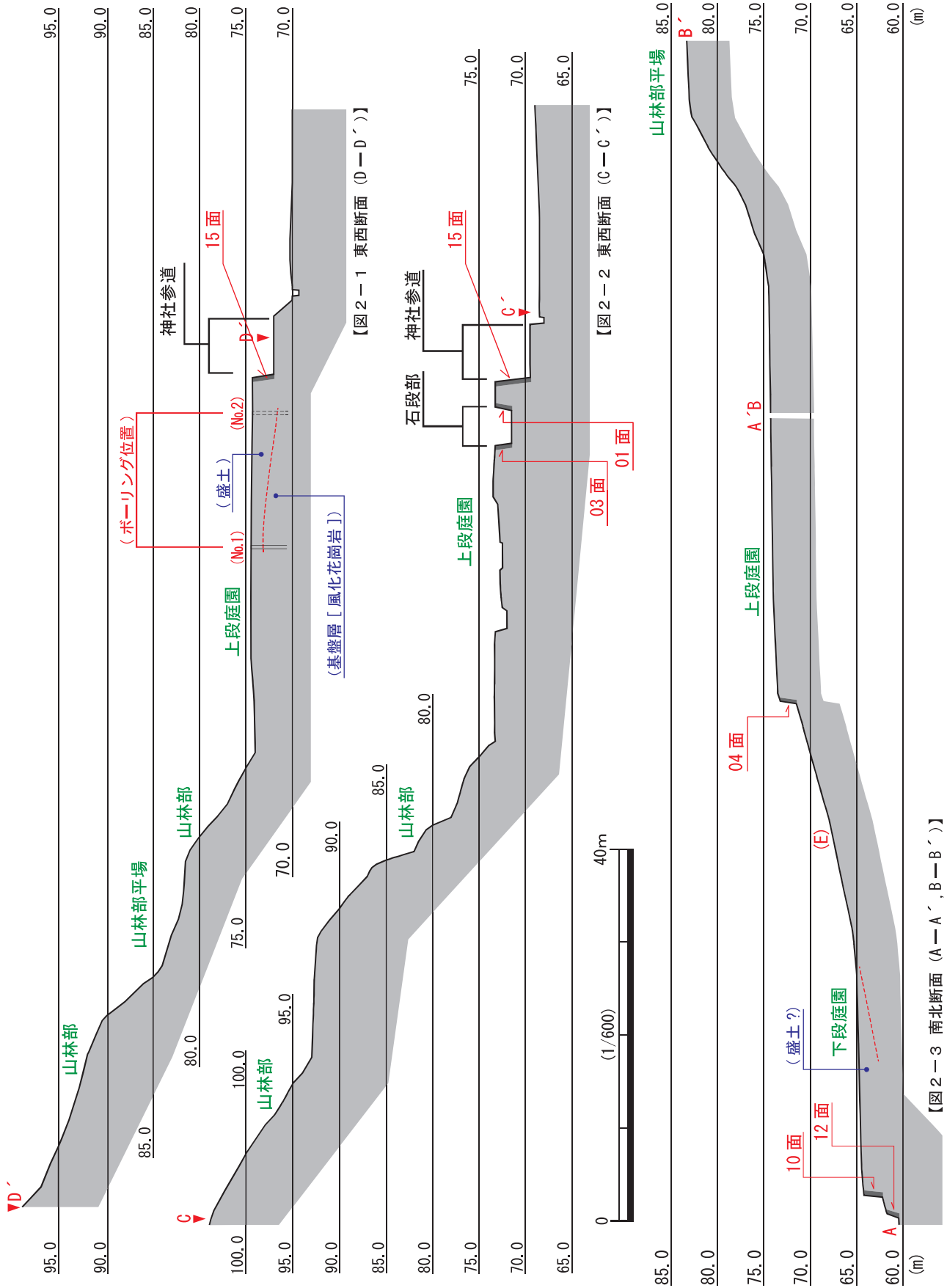


図2 現況地形断面図 [1/600]



① 01-02 面隅角部 (石段袖石垣)



② 03-04 面隅角部 (石段袖石垣)



③ 01 面 (石段袖石垣)



④ 03 面 (石段袖石垣)



⑤ 09 面 ([下段] 池南側石垣)



⑥ 05-06 面隅角部 ([下段] 池南側石垣)



⑦ 09 面隅角部 ([下段] 池南側石垣)



⑧ 10 面築石部 (下段庭園南面石垣) 変形箇所

図3 石垣写真1



① 15 面（上段庭園東面石垣）



② 15 面（上段庭園東面石垣）築石部



③ 24 面（山林部石垣）



④ 24 面（山林部石垣）築石部



⑤ 22 面（山林部石垣）



⑥ 22 面（山林部石垣）



⑦ 27 面（山林部石垣）



⑧ 28 面（山林部石垣）

図4 石垣写真2

変形原因の特定と修理が必要となっている（図3⑧）。

13～16面は仁比山神社参道に沿って長く伸びる庭園東側の外郭石垣で、庭園南東隅から塀中門までを13面、塀中門から東門までを14面・15面（図4①）とするが、14面と15面は袖石垣02面との接する部分から、高さ・積み方が大きく異なる部分で区分している。当該部分で特筆すべきは、15面における大石を使った意匠的な積み方であり、広く平らな面を持つ花崗岩野面石（幅1.5m前後）を横位に連続して配置する、近世城郭石垣における「鏡石積み」に類似するものである（図4②）。15面では参道からの高さ最大約2.2mを測るが、これはそのまま上段庭園と参道の比高差となっている。なお、15面の勾配は81度前後（1.5分）である。

山林部石垣（21～28面）

山林部における21～28面としたものは、主として遊歩道の路床を構築するものや、山側斜面を抑えるための擁壁、または背面の谷部において土砂流出を防ぐために設けられた堰状の石垣である。このうち最も規模が大きいのは22面（図4⑤・⑥）で、延長約19m、高さ最大3m、勾配約80度（2分）、大小の花崗岩の野面石や人為的に粗く割った割石を乱積み積み上げるものである。石の目地ではモルタルは認められないが、背面に栗石層を設ける余裕もない急傾斜地であることから胴込コンクリートの使用は十分考えられる。21～25面は山林部が最も庭園部に迫る南西部斜面に構築された擁壁であるが、（上段）池西側の山林部谷部では、斜面をつづら折れに登っていく園路沿いにも法面保護の26・27面（図4⑦）が築かれており、同じく花崗岩野面石の乱積みとなる。

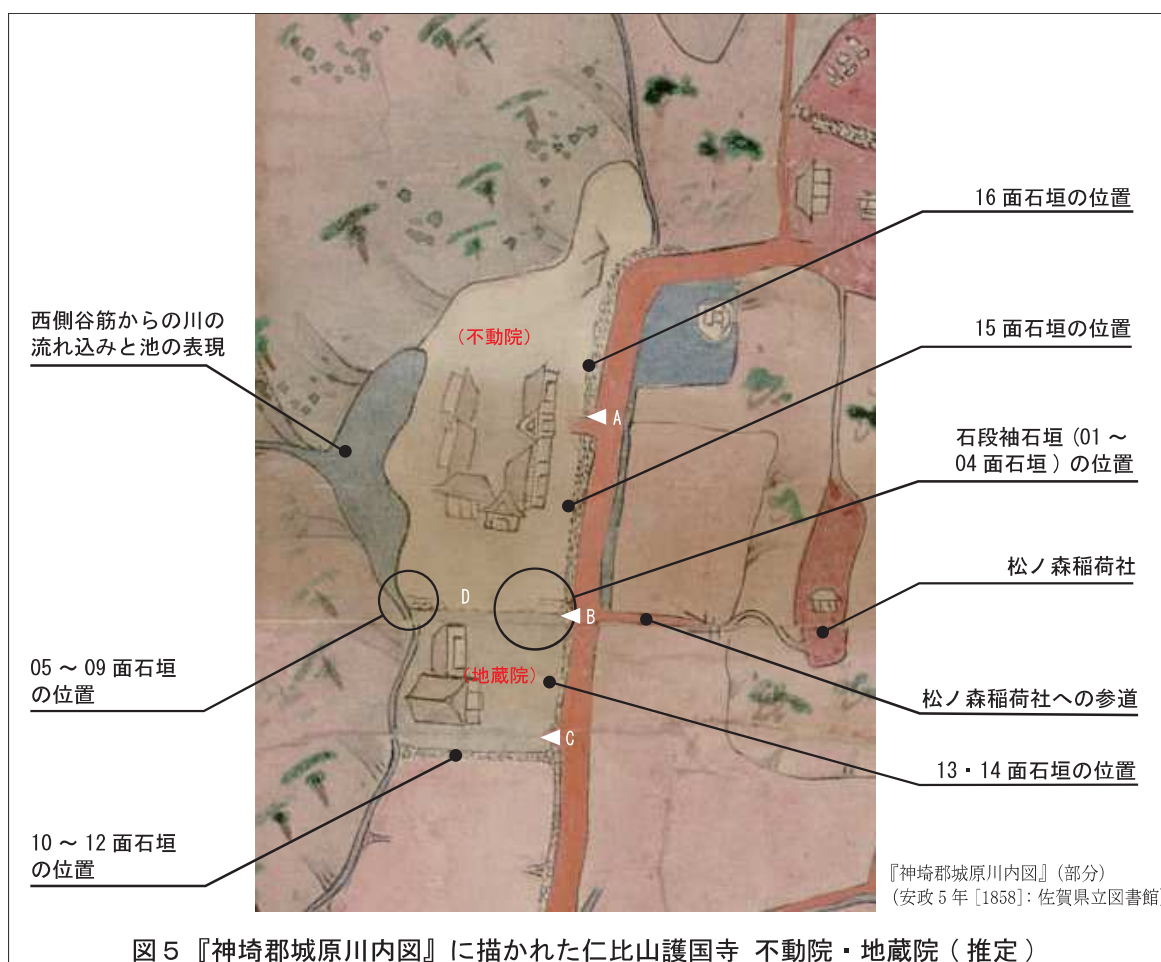
山林部で特殊なのは28面（図4⑧）であり、大量の花崗岩野面石を、面を揃えずに捨石状に積み重ねるもので、上部の園路路床の土台構築を目的に構築されているものである。裏込層・モルタル・コンクリートの使用については、現状では不明である。

■『神埼郡城原川内図』に描かれた石垣（図5）

安政5年（1858）の作図とされている『神埼郡城原川内図』（佐賀県立図書館蔵）は、現仁比山神社である「山王大権現」周辺の江戸期の状況を伝える唯一の絵図史料である。絵図中では神社南西側で九年庵とほぼ同じ、南北上下二段の平面プランを判読することができ、六棟の建物が描かれる北側の上段が護国寺塔頭の一つである「不動院」で現在の上段庭園、南側の二棟の建物が認められる下段の区画が同じく塔頭の「地藏院」で、下段庭園と推定されている。ただし、明確の根拠となる史料は伝わっておらず、現在、地藏院と呼称されている元「吉祥院」の位置と合わせ、あくまで推測の範囲での同定である。

当該絵図中では石垣と思われる灰色の着色による表現が読み取れ、その位置は現在の九年庵石垣とほぼ同位置と観察されることから、江戸時代の寺院石垣とそれによって構成されるグランドプランが概ね現在まで継承されてきているといえる。例えば庭園東側の外郭となる13～16面、南面の10～12面石垣、庭園内部においては上段庭園と下段庭園の境となる01～04面（石段部）、05～09面（下段池南面）などは、近現代の積み直しはみられるものの、江戸期の石垣をベースにしていることは明らかである。さらに言えば、現在、01～04面（石段部）と05～09面（下段池南面）との間（D）では石垣が築かれておらず、飛石が伝う斜面となって上段と下段を繋げているが、絵図中においてもこの部分では石垣の表現が途切れているなど現状と類似している。江戸期の造成段の構築の在り方を大きく改変することなく、そのまま近代庭園に引き継がれていることの証左のひとつと言える。

一方、絵図との違いで指摘される点として、01～04面（石段部）石垣付近では石段そのものの描写がみられず、上段（不動院）と下段（地藏院）を繋ぐ通路そのものについての詳細は不明である。また02面石垣のすぐ南側にあたる、東側の稲荷社からの道が突き当たる位置辺りで、かつては参道側への出入り口が開いていたとの言い伝えがあり、図中Bにおいて石垣の途切れのような表現も観察される。しかしながら当該箇所では、図中A・Cのような引き込み部分の赤色の表現はBではみられず、出入り口の存在の確証としては今のところ不足している。このように、01～04面・15面で構成される石段部の全体構造には未だ不明な点が残っている。



■石垣の推定構築時期

石垣の諸特徴と『神埼郡城原川内図』の所見を参考として、各石垣の構築時期を推測する。

(江戸時代の石垣)

01～04面からなる石段部分の石垣、庭園南面の10～12面、庭園東面の13～16面は江戸時代に構築された石垣を基礎とするもので、部分的に近現代の改修の手が入っているものの、近世寺院の石垣が遺存しているものと推定される。また下段池南側の05～09面においても、一部江戸時代の遺構が残存している可能性がある。

一方、これらの石垣は野面石による構築であり、矢穴・ノミ痕などの加工痕跡がみられないことから、その特徴は隅角部・築石部の積み方から判読するほかない。その観点では、一石一石の重心に配慮しながら石材を据え付けていく「布目崩し積み」・「布目積み」を主体とし、石材の一方を45度以上斜めに落とし込む「谷積み」・「落し積み」といった積み方がほとんどみられない点、また庭園東面15面における「鏡積み」状の大石の意匠的な配石方法などから、江戸時代前期を始築期と考えてよいものと思われる。仁比山護国寺、不動院、地蔵院の成立・改修を直接的に語る一次史料は伝わっていないが、『仁比山神社文書』における寛永9年(1632)の藩主勝茂女による仁比山神社の御正体の寄進(注1)、あるいは万治2年(1659)の第二代藩主鍋島光茂による社領の寄進(注2)、延宝2年(1674)の鍋島光茂・綱茂父子による大鳥居の寄進(注3)、等々、江戸時代前期から山王大権現(仁比山神社)への鍋島家の支援の記録が散見されており、上記のような17世紀代における社寺復興と修復への佐賀藩の関わりの中で石垣構築が行われたとするのが自然と思われる。

(近現代の石垣)

山林部の 21～28 面石垣はその構築技術からいずれも現代の石垣であり、倉田期における斜面地への園路整備に伴い構築されたものである。

判断が難しいのは下段池の南面、05～09 面石垣の改修時期であり、前述したとおり一部で江戸期の石垣がみられるほか、大部分が近代以降に積み直されている模様である。時期判断の手掛かりとなる小型の矢穴、エンショウノミ痕は伊丹期・倉田期のいずれの時期でも蓋然性があるが、石垣面が大小の雑石による乱積みで構成され、山林部石垣にも共通する積み方であることから、倉田期に最終的に改修された石垣とするのが妥当と考えられる。

伊丹期における石垣の改変、新造の有無・内容については現在のところ不明であるが、前述した『神埼郡城原川内図』と現状の比較でみれば、あるいは伊丹期に 01～04 面石垣を

改造し、石段部分を新造した可能性も捨てきれず、今後の検討課題である。

■現況地形の造成状況と石垣 (図 2)

図 2 は庭園部・山林部の東西 (図 2-1・2-2)、南北断面 (図 2-3) である。まず東西断面でみると傾斜 30° 以上の山林部斜面の法尻から庭園部の平坦面が続き、さらに庭園部平坦面は神社参道と図 2-1 で 2.2 m、図 2-2 で 3.7 m の段差をもっており、この部分の擁壁として 15 面石垣が構築されていることがわかる。次にこの段差が地山 (基礎地盤) の削り出しか、盛土構築であるかの手掛かりとして、令和 3 年 (2021) 度に上段庭園内で実施した 2 箇所 (No.1・No.2) ポーリングデータがある。このうち No.1 では地表面 - 1.2 m、No.2 では地表面 - 2.5 m までで礫混じりシルト質土による盛土層が検出されており、それより下位が風化花崗岩による基盤層との成果であった。これを図 2-1 に反映させると 15 面石垣による段差はほぼ盛土の高さ (厚さ) と揃い、このことから、上段庭園の東側平坦面は盛土により形成されたものであり、15 面石垣が平坦面造成の擁壁の役割をなしていることが確認できる。

また図 2-3 の南北断面では、その南端部で 10 面・12 面の二段の石垣と南側の平坦地との比高差は 3.7 m を測る一方、下段庭園北側の緩斜面地 (図中 (E)) をこのままの勾配で延長させると 12 面石垣基礎部まで続く可能性がある。つまりは下段庭園の南半部が盛土構築であり、10・11・12 面石垣がその擁壁として構築されていることは明らかである。

以上のことから、江戸時代前期における仁比山護国寺の寺域形成 (改修) は、山林部斜面を切土し、高さ 3 m を超える石垣を擁壁として盛土することで平坦面を構築する、城郭石垣の普請にも迫る大規模な工事であったといえる。

伊丹氏による明治期の庭園造作は、上記のとおり江戸時代寺院の石垣遺構・造成段をほぼそのまま継承して行われているものであり、随所に残る石垣は名勝庭園の骨格を形作る重要な構成要素といえる。

【注】

- (1) 「一四 鍋島勝茂女山王権現神体寄進願文書案」、「仁比山神社文書」7 頁～8 頁、『佐賀県史料集成 古文書編第五卷』佐賀県立図書館 1960
- (2) 「一九 鍋島光茂社領寄進状」、「仁比山神社文書」13 頁～14 頁、『佐賀県史料集成 古文書編 第五卷』佐賀県立図書館 1960
- (3) 参道入口の明神鳥居。柱の銘文より、延宝 2 年 (1674) に建立され、藤原光茂 (鍋島光茂) と藤原綱茂 (鍋島綱茂) の寄進で、仁比山護国寺の不動院・妙覺院・吉祥院の 3 名の法印が願主となり建立されたことが記される。(参考：神崎市史編纂委員会 2022 『神崎市史 第 1 巻 自然・民俗・石造物編』)

3. その他

(1) 字図



佐賀新聞 大正六年五月二十六日関連記事

「侯爵の仁比山行 佐賀驛歩廊と神埼にて講演」

公會堂に於ける三等郵便局長會に講演を了りたる大隈侯は夫人及一行を從へて十時

▲佐賀驛 着直ちに下だりプラットホームに西面整列せる吉塚、大牟田間、中原、早岐間及唐津、伊万里兩線各驛員、保線區、機関庫員約三百餘名に對し旅中而も偶然の事として別段講話す可き材料を有せず然し余は鐵道青年會顧問として多數諸君の現業員に對しては平素熱心なる同情を有し居れり現代の文明は駸々として向上し夫に伴ひ機械も亦著しく進歩せるが之を利用するには人の力を俟たざる可からず然し人間能率は程度ありて程度を超ゆれば却つて失策多く近時列車に度々故障あるは之れ怠慢の結果なりと雖も畢竟精神過勞が怠慢を生じたるに外ならず精神の慰安は精力を極度迄傾注せしむる上に於て至極必要の事なり依て鐵道院に於ても鐵道青年會を設て就業時間以外努めて現業員慰安の方法を講じ居れりとして働くべき時は充分に活動し休養の際は各種の娛樂に依りて自己精神の慰安に努むる事を懇々述べ尚一轉して今や我鐵道輸送力は非常の不足を生じつゝあれは早晚廣軌式となる可く又發達に伴ひ現業員も十萬は數十萬に増加し延長哩も一萬五千乃至二萬哩に達するは之又近き將來ならんされば此鐵道たるや實に大事業にして而も其從業員は規律的即ち『時』を基礎として働かざる可からず萬一之を誤るあらば莫大の損失と幾多の人命を失ふと共に又諸君が一度働きを休止せば直ちに世界は暗黒となる可き實に重大なる責任あれば時間を尊重すると云ふ觀念は一刻も忘る可からずとて『時』が生命なる事を約二十分に亘り縷々詳説する所ありて降壇吉岡鳥栖運輸所長の謝辞ありて暫時休憩間もなく列車到着したれば中央一二等貸切列車に夫々分乗し十時五十二分神埼驛着馬渡郡長其他多數有志の出迎を受け一行五十餘臺車をを連ね中島神埼警察署長の先驅にて沿道に堵列せる平ヶ里青年團、在郷軍人、神埼農産校神陽學館、神埼尋常高等小學校生徒其他多數町民の出迎を受けつゝ先づ櫛田神社に參拜玉串奉獻後堂側に小松の手植をなしたつて

▲記念館 講演會に向へり會衆三千殆んど立錫の餘地なき同地未曾有の群衆なりしが馬渡郡長の紹介に次て貞包町長の歡迎の辞あり續ひて侯爵は徐ろに壇上に進み自分が常に忘るゝ能はざる櫛田神社に參詣するに際し諸君に會合する事を得たるは余の非常に喜びとする所なり神埼町の一部に属する平ヶ里は余の舊領地にして諸君とは即ち櫛田神社の氏子兄弟なればなりとて先づ愛嬌を振り撒き神埼町が漸時發展の域に進みつゝあるは穀収漸次増加するが爲なりとて神埼素麵及麥粉其他の生産物が漸次販路を擴張され今や外國にも輸出を見るに至りたるは之れ町民諸氏の努力の賜なりとて益々其向上發奮を促し至極通俗的に約二十分餘の講演をなし急霰の如き拍手裡に壇を下るや馬渡郡長の發聲にて侯の萬歳を三唱し一行は再び車を驅つて大石太郎方に立寄り茶菓の饗を受く正午同邸を辭して仁比山に向ふ沿道には仁比山及東背振兩尋常高等小學校其他青年團出迎せしが特に舊領地平ヶ里（戸數四十餘戸）部民が部落入口に青竹を以て歡迎門を設へ舊領主歡迎の五文字を書せる扁額を掲げ其兩側に老幼男女袴羽織の衣紋正しく侯を出迎し居るは見るからに主從の情緒偲ばれて奥床しき限りなりきかくて北に進むに従ひ勾配愈々急となり車夫は一步に一喘頗る疲労の態なりしを同地方の青年團が一行の爲後押の勞を取りたるは奇特の事なりき聽て仁王門にて一同下車伊丹彌太郎氏夫妻其他親戚諸氏の出迎を受け參差せる樹間を辿りつゝ

伊丹家別荘に入る同家にては前日來多数の人夫を備して掃除萬端滞りなく行き届き居たるが一行は鬱蒼たる樹間に幽寂の氣を味ふあり細流滾々たる邊り俗塵を拂ふあり青葉を縫い來る初夏の風徐ろに面上を掠めて爽快の氣云はん方なし侯爵は終始ニコニコとして主人彌太郎氏其他の人々と打語らひつゝ切りに其風趣を賞せられしが間もなく丁重なる茶菓及午餐の折詰は清酒たる美妓の手に依りて運ばれ白鶴の芳醇なる香に一同陶然たる折柄、庭前には久留米一入組の囃入餅搗あり了るや博多より態々來山せし箱崎八重子、新田スミ子の兩女史靜々と侯夫妻の面前に進み四弦を抱ひて左の今村外園氏池作『伏屋のほまれ』を彈す

伏屋のほまれ

進んで政壇に一咳せれば宇内の耳目卒爾として欽ち退いて案頭書を繙けじ天下の子弟翕然として聚る識は古今に涉り徳は一世を蔽ひ清濁併呑の宏量を抱いて治乱應變縦横の略を有す誰かは君に儔ひせん徳川の流れ漸く濁りつゝ纓を洗ふに由なしとみるや慷慨悲憤一劍を提げて西肥の一角に屈起してより皇國の爲めと一筋に進める道の千難萬苦或ひは迅雷脚下にとろき或ひは紫電頭上にひらめき、死生の間を出つ入つ、奮闘こゝに六十年、氷の上を渡り來て、功成り名遂し花の春それさへ殊に目出度きを、古來稀てふ七十の、坂をむかしの夢とみて、今や八十の青嵐、あふげば高き富士が峯に競そふ動績を皇の、愛つゝ下し給ひたる、玉の御盃に酌む酒ぞ是れ神仙の醸てふ不老長壽の甘露なる『その客人をむかへしら、賊が伏屋の響にて子々孫々、末永く、誇り得るこそうれしけれ』

切々曹々盤上玉を轉がす妙音は一同をして恍惚たらしめ侯亦兩眼を閉て傾聴せるを見るかくて午後二時に至れり一同々荘を辞し裏手なる

▲山王神社 に參拜の後同地唯一の名物御田踊を見物し三時二十分下山門前に待てる腕車に搭し往路同様沿道多数の見送を受けつゝ四時神埼驛着四時五分同驛發列車にて歸佐直ちに公会堂史談會講演會に赴かれたり因に前記一入組の餅は侯爵より全部壽の文字を押印し舊領地部落民一同に配布せられたり

名勝九年庵（旧伊丹氏別邸）庭園保存活用計画
令和5年3月

編集・発行 佐賀県
佐賀市城内一丁目1番59号
編集・協力 株式会社都市環境研究所九州事務所
福岡市博多区綱場町5番15号
印刷 株式会社佐賀印刷社
佐賀市高木瀬西6-11-7